
遊戯王 ~ After of Chronicle ~

黒宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王〜After of Chronicle〜

【Nコード】

N0331BA

【作者名】

黒宮

【あらすじ】

ある日、部屋で過ごしていた主人公は色々あつて遊戯王GX……
「のような」世界に飛ばされましたとさ。大体こんなお話です。

プロローグ（前書き）

先ずはプロローグだけど、遊戯王ほとんど関係ない話だけです。

そして、作者は文才無いし遅筆だしデュエルタクティクスは低いしですが、よろしくお願いします。

プロローグ

「どうも、神様だ。さあ敬え」

いきなり出てきた女の子に言われた一言である。

「えーっ……………」

「なんだ？その顔は」

「だっていきなり出てきて神様とか言われてもなあ…つかここは何処だよ」

周りを見れば暗闇、目の前には白い服きた長い銀髪の高校生くらいの女の子。

3

「ここか？ここは…まあ世界と世界の狭間とでも言っておこうか」

「なにその二次元的展開」

「まあ信じれないのも無理は無いが……ふっ！」

バキッ！

！！？！！？！！

「いつてえええ！？」

「まあこれで夢等ではないとわかっただろう？しかし折れたわけで

もないし大げさだな」

「いっつつ…いや今思いつきり脛蹴ったよな！？しかもなんかバキッて聞こえたぞ！？」

「躰がなつて無いのか？」

「いやスンマセンまじ勘弁してください本当」

何なんだ本当に…そして暴力に屈する俺情けねえ；

「…まあいい。幸先は不安だが選んでしまったものは仕方ないか」

「ああ…はあ…で、仮にあんたが神様だとして俺に何かあるんでしょーか？」

多少呻いていたが、なんとか復活して聞いてみる。

…あ、目が慣れてきたからかわかんがかなり可愛いぞこの神様。

「そうだろう可愛いだろうもっと敬って崇めてもいいんだぞ？」

「心読むなよ…そして今ので色々台無しだからな？」

考えた瞬間明らかにポーズをとり始める神様少女。一体なんなのだろうか。

「ふむ…まあ良いだろう。そろそろ本題に移るとしようか」

と、何処から出したのか高級そうな椅子に座る神様少女。

「さて……GXか5D・sかどちらか選べ」

「まるで訳がわからんぞ」

偉そうに足を組んだ後に宣われた一言である。

「というかそれはあれか、遊戯王の話しなのか？巷で話題の転生とかトリップとかいう二次元的展開なのかまさに！？」

「意外と頭が回るじゃないか。誉めてやるからありがたく思えよ？」

「それはどうも……じゃなくてだなんだ……はあ、何か疲れた……」

しかし……ねえ……普通ならこんなこと信じれないけど、妙に現実味があるし、第一さつき凄く痛かったし……うーむ。

「というか、何で俺なんだ？というかどうしてそんな二次元的展開にならなきゃいけないんだ？」

「む？……まあ私も一応心優しい神様だから答えてやろう。が、その前に少々概念的な話をしなければいけないな」

とか言いつつ目の前の神様少女が足元を指差すと座布団が敷いてあった。

……あれか？心優しいの部分に疑問を持ったからか？
とりあえず正座で座っておく。

「さて、先ずはだ。世界は単一では無く、幾つも並列した……つま

り数多くのパラレルワールドが存在すると言ったら信じるか？」

「……………俺が自分の部屋か

らこんな場所に移ってるんだし、そう言われたら信じてしまうな」

「自分の考えはしっかり持つものだぞ？」

「たった今崩れたんだよ！」

心からの一言である。

「まあ柔軟だと思っておいてやろう。さて続きだが、そういうった平行世界は自分と似た世界同士で引き合い、だんだんとまとまって行くという性質があるんだが……ああ、この似た世界と言うのは、i f の世界の事さ。ま、アニメやマンガに置ける原作と二次創作の関係とでも考えてくれればいい」

「ふむふむ……」

こんどは近くにある他の世界とくつつくんだ。これは現実と二次元の関係とでも言うておくか。つまり、お前のいた世界でテレビやマンガに出た作品は、確実に「違う世界」として存在していると言う事だな」

……………えーと……………

「……………あゝ……つまり世界は一つじゃなくて、「もしも」の世界も含めて一つの作品の世界で……………あゝ……………うん、口に出すとわけわからん」

「全て理解しろとは言わんさ。が、その様子ならお前は一応理解出来たのだろうし、それでいい……理解力もある、と……」

うーん………んん？

「で、それと俺がここに居るのにどういう関係が？」

「半端なのさ……GXの世界も5D・sの世界も、その世界の規模がな。そして、世界と言うものは、異物が混ざると分裂してしまうんだ。その世界本来の流れと、異物が混ざった流れにな」

………まさか。

「つまり、数合わせ……か？」

「ん、やはり頭の回転は良いようだな。色々切り捨てて言えばそんなものだ」

「え………ないわ……」

数合わせに人間一人の人生使うなよ……

「ふむ……冷静なんだな。普通はもつと怒り叫んで強引に押し倒してくるものだと思うんだが」

「途中から色々意味が変わってる気がするぞそれだと………はあ………なんか疲れたからそんな元気も出ないんだよ……」

「若い内から苦勞するとは、大変だな」

誰のせいだよまったく…一応まだ17なんだけどなあ。

「……………まあ…行くなら、GXかなあ…理由は何となくだけど」

「一応言っておくが、「基本的な構成がGX」の世界だが？」

「……………ま、なるようになるさ、多分」

「…決定だな。私が言つのもアレだが、精々楽しむといい」

……………う…意識が…

「……………しかし、断る事も出来たのに受け入れるとは、流されやすいんじゃないか？」

「……………え？」

「普通は聞くものだぞ、そういう事は」

……………

「……………ないわ……………!!!!!!?」

……………こうして、俺は異世界に行くことと、なった。

...>u

プロローグ（後書き）

以上、主人公世界を渡る。
という話でした。

次回からは本編のGX世界です。

第一話・何はともあれ異世界の様です（前書き）

今回ははじめてのデュエル回です。

それでは、どうぞ！

第一話・何はともあれ異世界の様です

「……………無いわー……」

現在、多分どつかのホテルの一室。

神様少女と話して、意識が途切れたが目覚めたらベッドで寝てた。

そして、呆然としてるとベッド横のテーブルに手紙を発見。とりあえず読んでみると……………

- ・俺が元の世界で持っていたカードは一緒に送った事。
- ・今は原作的に開始直前であること
- ・次の日にはアカデミアの試験がある事
- ・金は非常に沢山用意してある事
- ・この世界での俺の名前は高原 遊緋>>たかはら ゆづひ<<であること

等々……………が分かった。

そして一言「……………無いわー……」である。

「……………いや、名前変わるのはいけどさ……」「遊」の字で……まあ考えでも仕方ないか……」

とりあえず、手紙を畳んで適当にバスルームに向かう。
一度さっぱり、意識を覚醒させたい……

「……………ああ、世界は変わっても姿は変わらないのね」

そして鏡を見て一言。

その鏡に移るのは、前髪は目が隠れるくらいの長さで、ほかはギリギリ肩に届くか届かないかの長さ。パツと見男には見えないが、すぐに女とも言えない、良くて中性的、悪くて中途半端な容姿である。それに春物の上着を着ている姿が今の自分。

……………若干、若返ったような、幼くなったような…

「ま、いつか」

一々気にしていたらきりが無い気がしたので、とりあえず置いておいて顔を洗い再びベッドへ。

と、ベッド脇にいかにもな、結構大きいトランクケースを2〜3見つけたのでベッドに腰掛け適当に一つ開いて見る。

「うわ、予想通り過ぎる……………って、あれ？」

中身は予想通り以前の世界で自分が持っていたカード……………なのだが、どうにも持ってなかった様なカードも混ざっている気がする。

「うん？……………やっぱり増えてる……………まあ、多いにこした事は無いか」

そのまま幾つか中のカードを手にとり確かめるが、明らかに持つてなかったカードまであるのが確認できたが、まあ饞別かなにかなるうと思っておく事にする。

「……しかし、自分の事ながらこんなでいいんだろうか……何かただ流され続けてるだけな気がしてならないな……お、あつたあつた」
何か、自分でも意外なくらいこの状況を受け入れてしまっている。
そんな自分に疑問を抱きながらも、三つ目のトランクケースを開くと、カードと一緒に入っている幾つかのデッキケースを発見。
その中の一つを手にとり開けてみると、そこにはやはり元居た世界で自分が組んでいたデッキが入っていた。

「……しかし、明日が試験か……もうちょい余裕を持たせて欲しかったな」

デッキケースを開く↓デッキをテーブルに並べるという作業を繰り返しながら思う。

とりあえず、明日使うデッキを選ばないといけないか……

「……あれ？そう言えばシンクロとか大丈夫じゃ………無いよなあきつと……」

時代的に不味いだろうなあ……多分、きつと。

そしてシンクロがダメという事はエクシーズもだろうし、他にも本編で重要な役割を果たすカードも不味いか………なんか、あくまでも「似ている」世界とか言われたけど用心しといっても間違いは無いだろ。

と、言う事はだ。

「えーと、シンクロダメで、エクシーズは元々そんなに使って無いから………あとサイバー・ドラゴンとかも一応外して………ええと……あ

あもうチューナーも除いて…あれ？」

一つ一つ順番に見ていくが………全滅…だ、と…？

「いや、まてまて………むむむ」

参ったな…意外と気をつけないといけないカードが多いぞ…

「………仕方ない、せつかくだしーから作るか」

時間を見れば今は夕方の16時27分。今から組めば、そこそこは良いのが出来ると思う。

「……さてと、始めますかね」

理由やいきさつはどうあれ、来てしまったものは仕方ないし、いきなりつまづくなんて事態は避けたいしな。

「……しかし…この中から探すのか」

と、大きめのトランクケース二個と半分にギッシリ詰まっているカードを見ながら、そんな事思っただった。

（翌日）

「あ、危なかった……………」

現在位置、試験場。

終了時間ギリギリ、限りなくアウトに近いが試験終了ギリギリである。

更に言えば、到着したのはついさっきだったりする。

……………多少、寝坊はしたけどそこそこ余裕を持ってホテルを出たままでは良かったんだけどなあ……………まさか道に迷うとは思わなかった…

しかも、とある人物を見かけなかったら多分俺はここに居なかったな、と、視線を少し離れた場所にいる人物に向ける。

……………その人物——GX主人公たる遊城 十代が目の前を走り去ったのは全くの偶然であり、軽く絶望してた俺は十代を見かけた瞬間にわき目もふらずに追いかけて今に至っていた。

そして現在、俺と十代は二人揃ってそれぞれ試験官の前に立っている。

十代の反対側を見ればやはりと言つべきか独特な口調のクロノス先生がおり、自分の視線を前に向ければがっしりした体格の試験官が居る。

まあ流石に一人ずつはしないか…100人以上居るはずだし…十代のデュエルは生で見たかったんだがこればかりは仕方無いな。

「それでは、これより試験を開始する。何、緊張しないで、自然体で挑んでくれ」

「えーと…はい」

…とは言つたものね、やはり緊張してしまうなこれは…何か幾つも視線を感じるし…とにかく、鞆からデュエルディスクを取り出して腕につけ、同じく鞆からデッキを取り出してシャッフル&セツトする。

使い方は昨日覚えたとし、デッキもなんとか完成した。後は全力を出すのみか…

「それでは、準備は良いかな？」

「…はい！」

「よろしい。それでは、これより試験を開始する！」

「デュエル！」

遊飛 : LP 4000
試験官 : LP 4000

「では、まず私のターン、ドロー！」

…ええー…言つたもの勝ちなのね……

「私は切り込み隊長を攻撃表示で召喚！さらに切り込み隊長の効果
を発動、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚出来る！こ
の効果で私はもう一体の切り込み隊長を攻撃表示で特殊召喚する！」
切り込み隊長 ATK1200 DEF400

……………これ、試験だよな？

未来ならいざ知らず、今の時代でそれはキツいんじゃないだろうか…

通称、切り込みロック。

切り込み隊長の特殊召喚の他のもう一つの効果、切り込み隊長がフ
ィールドに存在する間はほかの戦士族を攻撃出来ないという効果を
使い、隊長二枚を召喚する事で疑似的に攻撃不可能にするコンボで
ある。

「更に私はカードを一枚伏せてターンエンドだ」

試験官 : LP 4000 手札 3
フィールド : 「切り込み隊長」×2
魔法罫 : 「セット」×1

「……すう……はぁ……俺のターン、ドロー！」
深呼吸、そしてドロー。

「さて、先ずはあのロックを何とかしないと……えーと、手札……
は……え？」

……あれ？

「ん？何かあったのか？」

「あ、えー……いや、大丈夫です」

手札を見たまま固まっている俺を不信がったのか、試験官が声を掛けてきた試験官にとりあえず返事を返す。

が……全然大丈夫じゃ無い。

「無いわー……デッキ間違えるとか……」

そういえば、寝坊して慌てて出たからデッキを確認して無かったな………デッキケースは全部同じだったし；

しかもこのデッキは……色々不味いかもしれない……が、

「やるしか無いよなあ……俺はモンスターをセット、カードを3枚セットしてターンエンドです」

遊飛：LP4000 手札 2

フィールド：「セット」 × 1

魔法罫：「セット」 × 2

「では私のターン、ドロー！手札よりサイクロンを発動し中央のカードを破壊する！」

ソリッドビジョンによる突風が巻き起こり、セットしていたカードを破壊される。

…流石ソリッドビジョン、昨日試しにモンスターを召喚したりしたけど、こうやって受ける側に立つとすごいな。

「破壊されたカードは聖なるバリアーミラーフォースです」

「正解と言ったところか。なら、私はコマンド・ナイトを攻撃表示で召喚！更に永続魔法、連合軍を発動！」

コマンド・ナイト

ATK1200 DEF1900

げ……

連合軍はフィールド上の戦士族又は魔法使い族の数×200、フィールド上の戦士族の攻撃力を上げる魔法カード。

それにコマンド・ナイトはフィールドの戦士族の攻撃力を400上げるうえに他のモンスターが居ると攻撃対象にならない効果まで持っている。

つまり…

「切り込み隊長」 ATK2200 ×2

「コマンド・ナイト」 ATK2200

うわ、1000も上がってるし…

というか本格的に戦士族ロックかよ。

「バトルフェイズ！コマンド・ナイトでセットモンスターを攻撃！」

「セットモンスターは魂を削る死霊、戦闘では破壊されません」

相手フィールドからコマンド・ナイトが飛び掛かってセット状態のモンスターに斬りかかるが、姿を表した死霊は切られても一瞬揺らいただけで何も変化は無かった。

「む、ならば私はこのままターンエンドだ」

試験官：LP4000 手札1

フィールド：「切り込み隊長」×2 「コマンド・ナイト」

魔法罫：「連合軍」「セット」

「俺のターン、ドロー！……さて、どうするかな……」

相手のフィールドはロックが完成してる………というのは実はあまり問題では無かったりする。やろうと思えばあのロックは崩せるのだ。

が、

「……やってもいいのか、これ……」

手札を見ながら考える。

問題は……その方法………というかそれを可能にするモンスターを召喚してもいいかどうかだったりする。

「うーん………ん？」

と、不意に視界の端に移った光景に視線を向ける。

「古代の機械巨人……もうそこまでか……」

十代の相手、クロノスのエースにして象徴とも言える古の巨人。

……という事は、この後は、確か……

「……ふう……全く、バカみたいにアレコレ考えても仕方ないか……もう少し、流れに身を任せるのも悪くない、かな」

そして、その巨人に相対する十代を見て、何かアレコレ悩んでいる自分がバカらしくなってしまった。

……そうと決まれば……！

「……よし……まずは、手札から魔法カード、テラ・フォーミングを発動！デッキからフィールド魔法、死皇帝の陵墓を手札に加えます！」

デッキから一枚、カードが飛び出してきたのを引き抜き手札に加える。

「そしてそのまま死皇帝の陵墓を発動！」

ディスクからフィールド魔法をセットする場所が現れ、発動。その一瞬の後に、中央に燃え盛る炎が立ち上る古墳（？）が現れる。

「………行きます……俺は、ライフを2000払い、レベル10のモンスターを召喚します！」

「何……レベル10だと！？」

試験官が何やら驚いてるが……あ、レベル10のモンスターなんてこの時代ほとんど居ないからか。

「まさかコイツを出す事になるなんて……」

古の大地より現れる！地縛神 Aslla piscu>アスラピスク<！」

「――！！！」

陵墓の内側から、まるで、大地を裂くように、砕くように、振り払うように、黒色の大鳥が現れる。

「地縛神 Aslla piscu」

ATK2500 DEF2500

遊飛：LP4000↓2000

……何と言うか……出してしまったよ……；

一瞬ハチドリの地上絵が現れたからまさかと思ってひやっとしたけど、大丈夫みたいだな。

……というか、室内だからか？何かアニメで見たより小さい気がするんだが…

「な………地縛神…聞いた事のないモンスターだ…」

「あー…まあ、とあるイベントの時に偶然手に入れたんで……えーと、では続けます！俺はこのままバトルフェイズへ！」

詳しく聞かれたら凌げる自信はないし、適当に濁して進める事にする。

「む？だが私のフィールドには切り込み隊長が2体存在する！これにより攻撃する事は不可能だ！」

「知ってます……ですが…地縛神は相手プレイヤーにダイレクトアタック出来ます！」

「何！？その攻撃力でダイレクトアタックが可能だと！？？」

「その代わり、フィールド魔法が存在しないと自壊してしまいますけどね。では、アスラピスクでプレイヤーをダイレクトアタック！」

「フィールド魔法…ならば、攻撃宣言時にリバーズカードオープン！サンダー・ブレイク！手札を一枚捨てて死皇帝の陵墓を破壊する！」

「させません！リバーズカード発動！地縛波>グラウンド・ウェーブ<！フィールド上に地縛神が存在する場合、相手の魔法、又は罫力ードの発動を無効にし破壊します！」

「――！！」

「くっ！」

発動した瞬間、アスラピスクが大きく鳴き声をあげ、衝撃波がサンダー・ブレイクのカードを破壊した。

「こんどこそアスラピスクでダイレクトアタック！吹き飛ばせ、地縛烈風！」

「ぐあああああっ！？」

試験官：LP4000↓1500

宣言した瞬間、アスラピスクが大きく羽ばたいて上昇、そして一気に相手モンスターを飛び越え急降下して、最後に試験官の頭上で急停止しながら爆発的な暴風を作り出した。

……てか、何か適当に技名呼んだらそれっぽい事してくれたよ……すごいなデュエルデイスク。

「では、一枚カードを伏せてターンエンドです」

遊飛：LP2000 手札0

フィールド：「地縛神Asllia piscu」「魂を削る死霊」

魔法罫：「セット」×2

フィールド：「死皇帝の陵墓」

「く…確かに強力なモンスターだ……だが、攻略出来ない訳では無い！私のターン、ドロー！私は手札を一枚捨てて、ライトニング・ボルテックスを発動する！」

あ…

ライトニング・ボルテックス…手札を一枚捨てて、相手フィールド上の表側モンスターを全て破壊する魔法カード。

その効果により、頭上から稲妻がアスラピスクと死霊を貫き、破壊する。

「ゆくぞ、バトリ…この瞬間、墓地に存在するアスラピスクの効果発動！」なんだと！？」

試験官がまだ有るのかという顔をしている。

……まあ最上級でフィールド魔法依存とはいえ、今の時代で2500ダイレクトって時点で既に強力だからなあ…；

「アスラピスクが自身の効果以外でフィールドを離れた時、相手フィールド上の表側モンスターを全て破壊！更に、破壊したモンスターの数、800ポイントダメージを与える！」

「な、な…！？」

大地を砕くエフェクトと共に、アスラピスクが現れて翼を大きく羽ばたかせ、衝撃波とも言える風を放ち相手モンスターを、更に試験官をも襲った。

「ぐ、うわあああああ!？」

試験官：LP1500↓0

.....あれ？

「あ.....ついライフ8000の感覚でやっちゃった...」デュエル終了となり、ソリッドビジョンが消える。

.....そして、再び感じ始める視線。しかもかなり多い。そしてちらつと見れば一足先に決着がついていたのか十代とクロノス先生までこっち見てるし。

「.....あー...その、あ、ありがとございましたー...」

すごく...逃げたいぞ、これ.....

続く...

第一話・何はともあれ異世界の様です（後書き）

……デュエルって、難しいorz

そしてあっさりしすぎている気も……；

何はともあれ、今回は主人公の初デュエル回でした。

これからどうなるかは……作者にも分かりませんが、結構行き当たりばったりです；

それでは、また次回……

第二話・明らかになる事実というか状況（前書き）

今回は色々とせて：主人公の現状が発覚します。

更に、知ってる人は知ってるあのゲームからキャラが登場します。

……とりあえず、キャラ崩壊注意です。

これでいい自信がないorz

ではどうぞ！

第二話・明らかになる事実というか状況

「……………眠い、暇だ」

現在、アカデミア行きの船の中である。

船旅というのは存外暇なものであり、最初のうちは船首等に出て外や他の生徒の様子を見てたりしたのだが、一時間もすると流石に飽きてきたので、今は休憩スペースとなっている広い船室で横になつてたりする。

が、眠れない。

「……………生活リズム崩しちまったなこれは…はあ…暇だ…」

いよいよアカデミアって事で全てのデッキを確認したのが不味かったか……………試験が終わった後にも、増えたカードのおかげで幾つかデッキ作ってたし…というか今までずっとホテル暮らしをするはめになるとは思わなかったな…；

ただ、結構な間高い部屋取っててもまだまだあまりある資金にはびびったな。

いつの間にか財布に入ってた銀行のカード使ってみたら口座の中身8桁越えてたという…

まあそのおかげで、遠慮なくカードを買ったり遊んだりと自由が出来たから良かったけど。

そうして出来ていった私物は、ほとんどアカデミアの方へ送ってあ

る。

——正確には、アカデミアのオシリス・レッド寮に。

そう　　オシリスレッド　　である。

…あれか、遅刻したら問答無用でレッドか。自惚れるつもりは無いけどもしかしたらライエローかな〜と思ってたんだけどなあ。というかレッドって確か何人かと共同だったよな……苦手なんだよなそういうの……って言うか、今思ったけど同室の人が居るんじゃないか。闇にカード弄れないじゃないか…はつきり言ってみせれないカードが幾つもあるし。

三邪神とか、ブラックマジシャンガールとか、ブルーアイズとか、ユベルとかサイバーもだし、あとシンクロモンスターにエクシーズモンスターもアウト。

……いや、ギリギリだけど、サイバーは大丈夫だったか。少数だ

けど出回ってたし。ただ、それでもサイバーエンドとかは不味いな
となると問題は…

「……やっぱり地縛神だよなあ……」

そう、試験官とのデュエルで使ってしまった、地縛神 Asllia
p i s c u > アスラ ピスク<。

あれだけは本当に不覚だった。他のデッキならばまだ何とか出来た
かもしれないが、よりによって間違えて持ってきたデッキが、フィ
ニッシャーが地縛神しかない完全特化のデッキだった。

更に、問題はまだあった。

地縛神が アスラピスク しか入っていなかったのである。

元々、あのデッキは元いた世界で趣味で作ったデッキである。
地縛神のサポートカード、または相性の良いカードや単純に強いカ
ードを組み込み、地縛神は「全一枚ずつ」入れていたのだ。

それが試験の後にデッキを見てみれば地縛神はアスラピスクのみで、

他の地縛神のカードの代わりに適当な上級モンスターや魔法、罠が入っていたのだった。

そして極めつけに…

「…お前だもんなあ」

(きゅ?)

自分の横でぐったりと突っ伏してる 黒い鳥 を横目で見る。

— そいつは黒くて。

— そいつは鳥のようで。

— しかし良く見れば違って。

— どうみてもそいつは。

— 小さくデフォルメされたアスラピスクでしたとき。

……いや、きゅ？つて…仮にも地縛神だろお前…

とは思うのだが、船室のマットの上でぐったりしてる姿を見てるとアニメみたいな威圧感も何も無かったりする。

……思い返すのはやっぱり試験後の夜。

何かもう色々と疲れてホテルに帰ってきた俺がベッドに倒れて寝ようとした瞬間、ボフツとこいつが腹に落ちてきたのである。しかも実体化した状態で。

大きさが小さめの鷲（？）くらいのサイズのこいつに、不意打ちで多大なダイレクトダメージを受けた俺は盛大にパニックってた記憶がある。

……いやあ、あの時は焦った。まさかのダークシグナーフラグかとも思ったが、結局何をするでもなく無気力そうにしているだけであり、結局現在まで何も起きなかったのだった。

「……ていつかお前実体化してるだろ？」

「きゅ」

肯定の意。

「……まあ、今は誰も居ないからいいけど、気をつけろよ？言い逃れる自信は無いし」

「きゅ」

べた~~~~。

…… 本当に地縛神の威厳も何もありやしないな；

見るだけで脱力してくるので視線を天井に向け、ふと腰に着けてあるデッキケースを触る。

腰の、ベルトに引っ搔けるタイプのデッキケース、それが4つ。

その内の一つを開け、中身を取る。

「…… 荣誉の贄…地縛旋風…… フィールドバリア… 死皇帝の陵墓
……… うん、封印安定だな」

「きゅ!?!」

「だって、さすがにライフ4000でお前の効果はやバすぎるわ。
それに特化したら簡単に召喚そしてすぐゲームエンドであるし」

「きゅっ!きゅっ!」

「いて、こら、つつくな；」

手に取ったデッキ…もはやアスラピスク特化となった【地縛神】デッキを見て放った一言にかなり過剰に反応された。

…… まあ理由はそれだけじゃないんだけど、な…っていうか今更だ
けどなんで「きゅ」なんだ?…… って、いてて；

「まてまて落ち着け、何もお前を使わないとまでは言っただけから

な・そのためにとりあえずこの二つを用意してあるんだから！」

と、言いつつ起き上がり腰に着けてあるデッキケースの内の二つを示す。

一応、フィールド魔法を使用するデッキであるため、アスラピスクを投入出来るし、言っちゃ悪いがアスラピスク無しでも十分戦える構築ではある。

というか、既に出来ていたデッキを多少弄ってそうした……と言った方が良いか。

試験から今までの間、幾つかの大会やフリーデュエルに出てはみたが、その度にこいつはデッキに入りたがるし、召喚されたがる。

普段は無気力なくらいだらうとしているのにそういう時だけ妙にやる気が出ているのである、この小さな地縛神は。

と、いう訳でなし崩し的に、俺が使うデッキはフィールド魔法を使うデッキが増えてしまったのだ。

……まあ、まだ使わないデッキも多いんだけど。

そして、今示した二つは比較的以前からフィールド魔法を入れたデッキである。

……片方は扱いが難しい上、場持ちが良くて、もう片方はチューナーが入ってたりするが。

しかも両方とも今現在の時代には無いと思われるカードで構成され

ている……が、もし聞かれたらここら辺はイベント限定で手に入れたとかそういう理由で誤魔化す事にした。気にしてたら何も出来ないとも言つ。

「はあ…ということだから、分かつたろ？」

「きゅ……………」

「あれ？アスラピ」「うううううきもちわるいいですううう」「っと」

渋々、という風に頷くアスラピスク。

と、その姿がすうーっと消えたかと思った瞬間、船室の扉の一つが開いて、オベリスクブルーの制服に身を包んだ女子生徒が三人ほど入ってきた。

「うううもつだめですあたまがくらくらしめますうう」

「まさか私が酔い止めを忘れるなんて…………とりあえず横になって下さい。そうすれば少しは横になるはずですよ」

「……………（こくり）」

……………あれえ、なんか見覚えがあるぞあの三人。

肩まであるか無いかくらいの茶髪の娘に、
眼鏡を掛けた緑髪の娘と、
銀髪ツインテールの娘。

「……………え、いや、え……………マジかよ……………」

俺の記憶が正しければ、あの三人は……………

茶髪〓 宮田ゆま
眼鏡〓 原麗華
銀髪〓 レイン恵

タッグフォースでお馴染み？になってる三人じゃないですかやだなにこれどういう事ー！？

あれか、もはやタッグフォースもゲーム的に公式だから出てきても問題無いのか！？

確かに今やってるZEXALに何かどつかで見たことあるモブが出てるとは聞いたけどさ…………いや、まてよ…こっいつのも含めて「似ている世界」なのか？

「うつつもつだめですくるしいですつつつつ」

「喋らないでゆっくり目を閉じて下さい。下手に騒ぐと尚更辛いですよ？」

「……………（こくり）」

上から宮田ゆま、原麗華、レイン恵である。

というか盛大に船酔いしてるのなゆま。

……………はあ、見てらんないな…………

「その子、船酔い？」

「え？はい、確かに船酔いですが…？」

見かねて声を掛けてみると、通称「委員長」こと原麗華が返事を返してくれた。

「よっ、と……ならこれ飲ませると良い。あと新品の水。その様子だと、酔い止めを使った訳じゃないみたいだし、これ飲めば少しは楽になるだろ」

立ち上がり、近づきながら持っていた鞆から一応買っておいた酔い止めと買ったのはいいけど結局飲んでない水のペットボトルを取りだしそのまま差し出す。

「あ……すみません、助かりました」

「いや、気にすんな。買ったのはいいけど無駄になりそうだったし……それじゃ、何か気が引けるし俺は行こうかな」

「あ、その前になm「ううう……あ、な、なんかきそ、う……きもちわるiiiiiiii……」え！？み、宮田さんしっかりして下さい！？」

あゝあ、重症だなアレは………今更だが、酔ってから酔い止め飲んで効果あったっけ？……なんか船のる前に飲む気がしてきたな………うん、頑張ってもらうしか無いなどちらにしても。

等と思いつつ、船室を後にするのだった。

……なんか悪い事したかな？……あの状況で出るって事は見捨てるようなもんか……？

いや、だけどうっかり名前で読んだりしたら不味いし……というかそもそも女の子三人も居て留まれる程俺は女慣れしてないし。

……はあ、まあいいか。とりあえずタッグフォースのキャラも居る
って事は確認出来たし、甲板にでも出てみるか。

（船室）

「うう……もう、あんなのはいやだよ……」

「なら、次からはちゃんと準備をして下さいね？」

「あうう……肝にめくじておきます……」

うう……… けどまだ頭がぐらぐらする………

「それと、名前を聞きそびれてしまいましたがあのおシリスレッド
生にはちゃんと謝っておかないといけませんね」

「……… あの人……… 試験会場で見た」

「本当ですか？」

「……… うん」

「では、名前も知っていますか？」

「……………高原 遊飛」

「……うゝ……？……それって、もしかしてあの……えーと……地縛神……
ってモンスターを使った人……だったっけ？」

まだ横になってる私の隣で、今は座りながら話てる二人の話を聞いていると、印象に残っていた名前が出てきた。

「……………うん」

「あ、やっぱりそうだったんだ………凄かったなああの時は。もう一人の……えーと……遊城 十代君だったっけ？そっちも凄かったなあ……あう……」

まだぐらぐらするうゝ……

でも、本当に凄かったなあ。

E・HEROっていうモンスターもかつこよかったし、しかもあの攻撃力3000のモンスターを倒して逆転しちゃうんだもん。

それに、さっきの高原 遊飛君も、地縛神っていうモンスターは凄かったし、コストは払ったけど一回もダメージ受けないで勝っちゃったし。

「ふむ……私は実際に見た訳では無いですが、そこまで凄かったのですか？」

「あ…原さんは中等部の繰り上がりなんだっけ？」

「はい。ですが、その時は別に私用が入っていたので…」

なるほど…

私とレインちゃんは高等部からの編入組だから、生でみたんだよなあ。

あ、ちなみにレインちゃんとは試験の時に、会場無いで道に迷った所を助けて貰ってから仲良くなってアドレスまで交換したんだ。それで、原さんは私が船酔いし始めてレインちゃんが介抱してくれてる時に声を掛けてくれたんだ。

……あれ？私誰に説明してるんだろ？

ま、いいや。

「なるほど…凄かったですよホント！こう、ばぁーんってなってドーンってなってバリバリって感じなんです！」

「もうちょっと具体的に説明して下さい」

「……………（じくり）」

「あう」

「はあ…ですが、それだけ元気になれば大丈夫でしょう。相手の名前も分かりましたし、あちらに着いたらこれを返ってきて下さいね？」

「分かりました」

原さんから余った酔い止めを受け取って、鞆に入れておく。

「……………時間」

「あら？もう到着時間ですか……………所で、宮田さん？」

「え、はい」

「その…何で敬語なのでしょう？」

「えーと……………何となく使わないといけない気がしたから、かな」

「……………そう、ですか」

「??」

続く…

第二話・明らかになる事実というか状況（後書き）

……ヤバい、全然わかんないぞ特にゆまorz

彼女が好きな人には特に申し訳ないですorz

そして相変わらずアッサリした中身……ですが、このままサクサクと進めようと思います。

では、また次回で。

第三話・そして始まる決闘生活。その一歩。（前書き）

アカデミア到着編。

ではどうぞ。

第三話・そして始まる決闘生活。その一歩。

「いやあ、どこに行っても校長先生の話ってのは長いもんなんだな……」

「きゅ……」

現在位置、デュエルアカデミア・オシリスレッド寮の自室。

酔い止めを渡したあの後、ぶらぶらと時間を潰していたらアカデミアがある島に到着し、直ぐにぞろぞろとアカデミア校舎に集合してお馴染みの長々とした入学式を終えた後、寮の自室に向かう事になり今に至る。

「しっかし暇だ……歓迎会にはまだ少しあるし、余りに話が長いから立ったまま寝てしまったし……おまけにまさかの一人部屋ときた」

手に持っている、元々あった勉強机に置いてあった手紙を見る。

その手紙に、人数が半端だったので一人部屋になりますと書いてあったのだ。ちなみに寮長からと書いてあった。

と、いう訳で絶賛一人である。

危惧してたカードの心配等は無くなったがそれはそれで残念だな……

……

……とは思ったのだが、そういう事なら遠慮はいらないと思い、あらかじめ買っていたカーペットを敷いて、同じく買っていた大きなテーブルを置いて、気に入って買ったクッションを幾つか出し

て設置した。

……完全に一人部屋の感覚で買い物してたなあ……しかも少し考えれば、
備え付けがあるって考えるはずだけどあの時は初めての大金に浮
かれてたんだよな……

何はともあれ、完全に自分一人の部屋に模様替えしてしまったのだ
が、その作業をしてもまだ歓迎会まで時間が余っている。

「……仕方がない、残りの荷物も出すか」

ベットの一段目で相変わらずべた~~~~~っとしてるアスラピ
スクを尻目に、部屋の片隅に積んである段ボールを開けていく事
にする。

ベリベリベリベリベリベリ……

トランクケース……ということはカードか。

「整理用のケースは………あ、こっちか」

ベリベリベリベリベリベリ……

次々とダンボールを開けていき、を取り出す。

「……こんなもんか……さてと」

一通り取り出して勉強机に並べた後、トランクを開いてあらかじめ種類別やシリーズ別といった様に纏めていたカード達をケースに入れて重ねていく。

……しかし、纏めてた時に嫌というほど思い知ったけど多いな…

「……シリーズ物も結構あるし…今度また何か作るかな」

次々とケースにカードを入れながら考える。

ドンドンドンドン!!

「ん？」

と、そんな事をしていたら部屋の扉がめちゃくちゃ叩かれた。

「はいはいいどなたです……か…え？」

「お、居た居た。時間になっても来ないから先生が呼んでたぜ？」

………ドアを開けたら遊城 十代が居た。

まさかこんな事でエンカウントするなんて………て、時間？

「え、もうそんなに………うわ、過ぎてるし…うん、とりあえずわざわざすまん」

「気にすんなよ、これから一緒の寮で暮らすんだしな！それよりお前、試験の時に俺と同時に始めた奴だろ？デュエルしようぜデュエル！」

と、一気に話してくる十代。とてつもなく目がイキイキとしているし、実際にこうして会つとどれだけデュエルが好きか分かるな。

「まてまて、とりあえず自己紹介だ；俺は高原 遊飛。思ってる通り試験の時に同時にやった奴だよ。そっちは？」

「おっと、わりいわりい；俺は遊城 十代。ちょうど隣の部屋に住むことになったんだ、よろしくな！」

「こちらこそよろしく頼む；っと、呼ばれてる訳だしさっさと行くか」

「あゝ、そうだった；；腹減ったし行こうぜ」

会話もそこそこに、部屋に鍵を掛けて十代と共に一階に降りて食堂に向かうのだった。

く時は流れ翌日の午後、アカデミア校舎内く

「へー、そんな事があつたのか」

一通り授業を終えた後、何となく十代達と教室で話していると昨日の夜あつた出来事を教えてくれた。

…そういえばあつたなその万丈目のイベント……昨日はあのあと、十代のおかげで翔や隼人と友人になって歓迎会で色々飲み食いして、部屋に戻ったら急に来た疲労感と満腹感に負けてバツタリ寝てしまつたんだよな……

「アニキと起こしに来たんだけど、高原君全っ然起きる気配が無かつたっス」

「それで仕方ないから翔と二人で行つたんだ。悪いな遊飛……」

「いや、気にはしてないさ」

確かそのイベントはガードマンだかが来てデュエルは中断。危うく見つかる所だったはずだ。それにブルー時代の万丈目はちよつとアレだし。

「さてと、それでだ二人共。せつかくだしこの後部屋に来ないか？」

「「なんでだ（っす）？」」

「いや、何となく。強いて言えば友人記念？」

「なんで疑問文なんスか……」

「気にするな、思いつきだし。それにこっち来るときにめちゃうちや菓子類買ったから、ダンボール積み上がってるんだよ……今朝届いたし……」

無計画に買った結果がアレだよ……部屋の片隅に天井まで積み上がったしなあ……

「あゝ、だから朝あんなに疲れてたんっすね。」

「ふゝん……なら、人が居た方がいいか……あ、ちょうど良いところに！おい！三沢ー！」

「ん？…何だ十代と翔か。それにそっちは…？」

朝から何であんな疲れなきやいけないんだろうか……と、今さらながら思い始めていると、ちょうど教室を出ようとしていたライエローの生徒を呼び止めた。

………おゝ三沢だ。間違はなく三沢 大地だ。そういえば居た三沢 大地だ……正直忘れてた。心の中でスマンと言っておく。

「あゝ、俺は高原 遊飛。よろしく」

「俺は三沢 大地だ、こちらこそよろしく頼む………高原………という事は君が試験でノーダメージで勝ったという高原 遊飛か？」

「えーと……まあそういう事にはなってるけど、アレは運が悪かったと言つか、良かったと言つか……」

「??どついう事だ?」

……いや、まさかデツキを間違えたなんて言えないしなあ……

「それより三沢、この後暇か?遊飛が皆で集まりたいって言ってるんだ」

「ん?この後なら暇だが…良いのか?」

「問題無い。人は多い方が楽しいしな」

あの部屋意外に広かったし、それに三段ベットのおかげで縦にも空間あるから結構入れそうだし。

「ふむ…そういう事なら遠慮無く行くとしよう」

三沢 大地が仲間になっ（ry

「そうだな…あとは隼人も誘っておいてくれ。さつき声を掛けようと思っただけで用事があるのかどっか消えてたんだ」

「じゃあ僕がメールしとくっス」

「頼む。それじゃ、早速いk「やっと見つけました〜っ!」ん?」

だいたい話が纏まった所で教室を出ようとすると、ちょうど一番近い教室の入り口から勢いよく走ってくる人物が一人。

「探しまし…っきゃ!?!」

「うおつとと!？」

目の前まで来て何故かズルツと滑って転びそうになったその人物――
宮田 ゆまをギリギリ受け止める。

……今、何も無いところで滑ってたよな…

「ふう…大丈夫か？」

「あうう…助かりましたっ…」

とりあえずしつかり立たせる。

「いやいや、無事で良かった。所で、探してたって、俺を？」

「はいっ！昨日のお礼がしたくて…あ、あとこれありがとうござい
ましたっ！」

と、言つて差し出して来たのは昨日委員長に渡した酔い止めだった。

「そんな礼を言われる様な事はしてないと思うんだけどな…」

「そんな事無いですっ」

「高原、その人は…？」

「ああ、昨日船の中で酔ってたから見かねて酔い止めをあげたんだ
よ」

「宮田 ゆまですっ！よろしくですっ」

「……………レイン 恵」

「うおっ！？いつの間に!？」

少々置いてきぼりを喰らっていた十代達を代表して三沢が声を掛けてきて、それを切っ掛けに自己紹介してくれた。

というかいつの間にレイン来たんだ？本当に気付かない内にゆまの隣に居たぞ…

「なるほどな。俺は三沢 大地だ、よろしく」

「丸藤 翔っス」

「俺は遊城 十代、よろしくな!……………そうだ、二人も一緒に遊飛の部屋行かないか？」

「まてまて俺にも言わせる……………んじゃ改めて、俺は高原 遊飛、よろしくな」

……………というか自己紹介したのはこれが最初か。

「皆さんよろしくですっ!……………えーと、遊飛君のお部屋、ですか？」

「ん？ああ……………いや、せっかく知り合ったし俺の部屋に大量に菓子類が有るから、集まるか？って話をしてたんだ」

「あ、それ凄く楽しそうですっ！私も行きますっ！っ！レインちゃんも一緒に、ねっ？」

「……………うん」

「りょーかいっと……………そういえばい……………あの眼鏡の娘は？」

「……………用事がある」

「ふむ……………なら仕方ない、か」

という事で、何だか気付いたら更に二名追加。

えーと……………

俺

十代

翔

隼人

三沢

ゆま

レイン

七人か……………まあ入るだろ。

……………ダンボールさえどければまだ余裕が有るとは思っただけどな……………

「んじゃあ今度こそ行くか」

くオシリスレッド寮・自室く

「うわ、ダンボールが山になってるんだな!？」

「正直反省してる」

校舎から寮にぞろぞろ移動してる途中で隼人と合流、そのままぞろぞろとレッド寮に着いて現在俺の部屋である。

「まあ気にするな、入れ入れ」

「んじゃお邪魔するぜ」

とか言いながらぞろぞろと入ってくる。

……予想以上に狭くなったな。

「うん、誰か一人くらい一番下のベッドに入れ。ちなみに俺は一番上しか使って無いから気にはすんな」

と言いながら自分はダンボールを開けて中から食い物を取り出す。

…やっぱりスナック類が多いな……あ、チョコあった。

「あゝ……翔、ちょっとこれテーブルに置いといて」

「わかったっス」

「へえ、俺達の部屋とはかなり違って見えるな」

「まあ、実質一人部屋だし、自分で模様替えしたし……えーと……あとこれだな。飲み物は適当にこの中から選んでくれ」

ガサガサとダンボールの山を漁って一通り菓子類にジュースのペットボトルやら何やらを取り出した後、ちょうど開いていたゆまと十代の間に座った。

ちなみにベッドに入っただのは隼人だった。

「……高原の家はもしかして金持ちなのか？」

「あゝ……いや……その、うん、ちょっと宝くじを当てて、な」

三沢の問いに言葉を濁しながら答える。

……いや、さすがに気付いたら億単位は有ったなんて言えない。

「んじゃあ、まあ適当に食べてくれ。あの量は一人じゃ地獄なんだ……」

「どうしたらああなるまで買えるのか解らないんだな……」

「俺にも分かん。気付いた時には遅かったし……」

ビリビリと包装を破いたりしながら中身を開けていく。

それと同時に皆手を出して取っていった……おい十代、ポテトチップ

ス驚掴みしてくなよ……まだあるけどさ。

「おっと、ティッシュ置いておくか」

えーと……あ、勉強机の上か。

「スマン三沢、ちょっとその机にティッシュあるから取ってくれないか？」

「ん？わかった」

「……なあ遊飛。あそこに有るの、もしかして全部デッキか？」

「あゝ……まあ一応。ただ大半が調整中だし、どちらかと言えば作成中って所だな………なんでか知らないけど、しつくり来ないんだよなあ……」

「え？あれ全部ですかっ！？」

三沢にティッシュを取って貰った時、目で追ったら見えたのか十代が壁に掛かっている網ラックを指さした。

というか正確には網ラックに引っ搔けるように付いているデッキケース。その数………大体10個くらい。

「すっげえな！くゝ、デュエルするのが楽しみだぜ！」

「ま、一応完成してるデッキも有るんだけどな」

腰に着けてるデッキケースを外してテーブルに出していく。

「まだ有るのか…」

「まあな。どうも一つのデッキを使い続けるのは苦手なんだよ」と言いつつ4個全てテーブルに出す。地味にさつきから角が当たって痛かったんだよな…

「なるほどな。その気持ちは分からんでもない」

「あうう…デッキがいっぱいです…」

「じゃあ、その中に試験の時に使ったデッキがあるのか？」

「まあな…正確には『元』試験で使ったデッキだけだな。あの時とは構成が大分違うし…言っとくけど俺はよほどの事が無い限りこのデッキは使わないぞ？」

「え、何でだよ？」

「強すぎるし、あまり目立ちたく無いからな…特に、今の構成だと簡単に1ターンキルしちゃうし…それに、俺のデッキはこれだけじゃない。せつかく他にも作ったんだし、なら使ってやらないとなってさ」

「なるほどな…そういう事なら仕方ないな！」

「うーん…良いこと言ってたけど、何かさらっと恐ろしい事を言っただ気がするっス…」

「そうなんだな…俺じゃ考えられないんだな」

「ほえ……」

「……………（モグモグ）」

とは皆の反応。

……あれ？なんだこの空気？どうしてこうなった？

「ま、まあそういう事だ……その代わり、他のデッキはどんどん使
つてこうと思ってるし……そうだな、もう少ししたらデュエルす
るか？皆も気になってるみたいだし」

「本当か！？」

「本当だ……だから落ち着け……」

「十代君は本当にデュエル好きなんだね」

「おう！すっげえ楽しいしさ……」

ゆまの言葉に、当然と言うように返す十代。

はは、全く……これは下手な勝負できないな。

さて……何のデッキを使うかな………

続
く
…

第三話・そして始まる決闘生活。その一歩。(後書き)

デュエルも無ければ、長くなる訳でも無い……orz

さてさて、本格的に原作メンバーと絡み始めて、そのうえTF組とも絡み始めました。

次回はいよいよ十代とのデュエル、ではまた…

第四話・悠然たる溪谷とそびえ立つ摩天楼。（前書き）

いよいよ主人公対主人公です。

と、その前に一応注意書きを。

書いてる内に、OCGでは禁止になっているカードや、原作の効果となっているカードが登場します。

嫌な人はすみませんですorz

では、どうぞ！

第四話・悠然たる溪谷とそびえ立つ摩天楼。

「さてと、アカデミアで初めてデュエルするのが十代とはな……これも何かの縁か？」

現在位置、オシリスレッド寮裏手にある開けた場所。時刻は大体夕方。

あの後皆で飲み食いしながら雑談に興じた後、十代と約束した通りデュエルする事になり7人でオシリスレッド寮の裏手に来ていた。

……アカデミア校舎内のスペースを使っても良かったんだけど、今からまた行くのは面倒という事でここである。

そして今は十代と二人で向かい合い、いざ始めようと言う所だ。

「…………あれ？良く見ると遊飛君のデュエルディスクって、僕たちのと違う？」

「ん？まあな。申請すれば問題無いって言ってたから自分のを使ってるんだよ」と返して自分のデュエルディスクを見る。

十代達のアカデミアから支給されたデュエルディスクとは細部が違っていたり、所々青紫のラインが入っている俺デュエルディスクは、この世界に来たときに部屋に有った物だ。試験の時もこれ使ったし、中々腕に馴染むんだよな。

「ま、それは良いとして。何使うかな……」

とりあえずそれは置いておいて、使うデッキを考える。

「……………ふむ…そうだな…よし、これにするか」

少し悩んでから、再び腰のベルトに着けたデッキケースを一つ開けてデッキを取り出す。

「よっしゃ、じゃあ始めようぜ！」

「おう……………いや、ちよつとまって」

「ん？どうしたんだ？」

「いや、ちよつとな……………よし、これでいいぜ」

あぶねえあぶねえ、そのまま始める所だった…

別のデッキケースから二枚、カードをデッキに入れてシャッフルしてまたディスクに入れる。

「何だ？カードが足りないのか？」

「いや、そういう訳でも無いけど…まあ、なるべくデッキに入れておこつて思ってるカードだな」

一枚は言わずもがなアスラピスク、もう一枚はそのサポートカードである。

……………まあ、専用以外だとあまり出ないんだけど、こればかりは仕方ない。

「さてと、今度こそ始めるか」

「よっしゃ、それじゃやるか！」
互いにディスクを構え……

「デュエル！」

十代：LP4000
遊飛：LP4000

「先攻は貰うぜ！ドロー！」

あ、先攻取られた…

「俺は魔法カード「E・エマージェンシーコール」を発動！デッキから「E・HERO クレイマン」を手札に加え守備表示で召喚！カードを二枚セットしてターンエンドだぜ！」

「E・HERO クレイマン」
ATK800 DEF2000

十代：LP4000 手札 3
フィールド：「クレイマン」
魔法罫：「セット」×2

十代のフィールドにはいかにも頑丈そうな土のHERO、クレイマンが1体。

ふむ、最初は様子見か？

「俺のターン、ドロー！」

さてと、手札は……ま、妥当か。

「俺は……フィールド魔法、「竜の渓谷」を発動！」

「わあ……」発動した瞬間、周りの景色がソリッドビジョンによりタ焼けに照らされる渓谷となる。

更に上を見るとちゃんとドラゴン達が飛び回っていた、芸が細かいな本当に。

そしてちょうど時間も夕方、夕陽も相まってかなり綺麗な光景となっていた。

「……と、よし……更に、発動した竜の渓谷の効果を発動！1ターンに一度、手札を一枚捨てる事でデッキからドラグニティと名のついたレベル4以下のモンスター1体を手札に加えるか、デッキからドラゴン族モンスターを1体墓地へ送るかのどちらかを発動する事が出来る！俺は二番目の効果を発動し、手札の「ドラグニティ・コルセスカ」を捨ててデッキから「ドラグニティ・ドウクス」を手札に加える！」

墓地へコルセスカを送り、デッキからドウクスを取り出す。

「そしてドウクスを召喚し、ドウクスの効果を発動！召喚に成功した時、墓地からレベル3以下のドラグニティと名のついたドラゴン族モンスターを1体装備カード扱いとして装備する事が出来るので、俺は墓地のコルセス力を装備させる！」

俺のフィールドに鳥の頭と翼を持った人型のモンスターが現れ、手に持った……えーと、神社とかで見るような奴を一振りすると、何処からともなく薄いピンク色をした小さなドラゴン、コルセス力が現れドウクスの腕に巻き付いた。

…え、そうなってるのかよ。

「と、更にドウクスの効果により、自分フィールド上のドラグニティと名の付いたカードの数200ポイント攻撃力ドウクスの攻撃力は上がる！」

「ドラグニティ、ドウクス」

ATK1500 ↓ 1700 ↓ 1900

DEF1000

「おお！面白い効果してんな！だけど、それじゃクレイマンは倒せないぜ？」

「これで終わりじゃないぞ……更に俺は永続魔法、「竜操術」を発動！竜操術の効果によりドラグニティと名の付いたモンスターは攻撃力が500上がる！そして竜操術のもう一つの効果を発動！1ターンに一度、手札からドラグニティと名の付いたドラゴン族モンスターを装備カードとして自分フィールド上のモンスターに装備する事が出来る！俺は手札の「ドラグニティ、ブランドイストック」を

ドウクスに装備する！」

竜操術の効果により、今度は水色の小さなドラゴン、ブランディストックがドウクスの足に張り付いた。

……というか……息が続かねーよ流石に……

「……ふう……よし、これにより、ドウクスの攻撃力は更に上がる！」

「ドラグニティ、ドウクス」

ATK1900↓2400↓2600

「攻撃力2600!？」

セツトが気になるが……ここは攻める！

「バトル！ドウクスでクレイマンを攻撃！」

そう簡単に攻撃名は思い付かなかった……

とか思っていたら、ドウクスが殴り付けるようにコルセスカでクレイマンを刺して、クレイマンを破壊した。

「そして、ここでドウクスに装備したコルセスカの効果を発動！このカードを装備したモンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、デッキから装備モンスターと同じ種族・属性でレベル4以下のモンスターを1体手札に加える事が出来る！俺はデッキから「ドラグニティ、レギオン」を手札に加える」

「く、だけど俺もトラップカード、「ヒーロー・シグナル」を発動！自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊された時、手札がデッキから「E・HERO」と名のついたレベル4以下のモンスターを特殊召喚する事が出来る！俺はデッキから「E・HERO スパークマン」を攻撃表示で特殊召喚するぜ！」

ヒーロー・シグナルの効果により、青と黄色のカラーリングをしたE・HEROが現れた。

が、この状況なら好機！

「ならばドウクスに装備しているブランディストックの効果だ！ブランディストックは自身を装備しているモンスターを、一度のバトルフェイズで二回攻撃させる事が出来る！ドウクスでスパークマンを攻撃！」

「何だつて！？ならトラップカード、「ヒーロー・バリア」を発動！自分フィールド上に「E・HERO」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、相手の攻撃を一度だけ無効にする！」

二回目のドウクスの攻撃、今度はブランディストックが張り付いた足でライダーキックの様な感じで攻撃したがスパークマンの前面に現れたバリアに防がれてしまった。

「よりによってスパークマンを残しちゃったか……………俺は一枚カードをセットしてターンエンドする」

遊飛：LP4000 手札 2

フィールド：「ドウクス」

魔法罫：「コルセスカ」「ブランディストック」「竜操術」「セツト」

フィールド魔法：「竜の渓谷」

「へへ、俺のターン、ドロー！今度は俺から行くぜ！手札から魔法カード、「融合」を発動！フィールドのスパークマンと手札の「E・HERO エッジマン」を融合！来い、「E・HERO プラズマヴァイスマン」！」

フィールドのスパークマンと、新たに現れた金色のE・HERO、エッジマンが融合の渦に消えた後、バチバチと放電しながら巨大な腕部をもつプラズマヴァイスマンが現れた。

く…プラズマヴァイスマンは確か…

「そしてプラズマヴァイスマンの効果を発動！手札を一枚捨てて相手フィールド上の攻撃表示モンスターを破壊する！俺は手札の「E・HERO ネクロダークマン」を捨ててドウクスを破壊するぜ！」

プラズマヴァイスマンの両腕から電流が迸り、それがドウクスを捉えた瞬間、感電して爆発した。

やっぱり除去効果持ちだったか！

「バトル！プラズマヴァイスマンでダイレクトアタックだ！」

「それは通す訳にはいかないな！トラップ発動、「ガード・ブロック」！戦闘ダメージを0にしてデッキからカードを一枚ドローする！」

危ない危ない…

「げ、マジかよ……なら俺はモンスターをセットしてターンエンドだぜ」

十代：LP4000 手札 0

フィールド：「プラズマヴァイスマン」「セット」

魔法罫：なし

「俺のターン、ドロー！」

（きゅっ！）

………アスラピスク引いちまったよ…

………よし。

「俺は竜の溪谷の二つ目の効果を発動！手札から「地縛神 Asll a p i s c u > アスラ ピスク<」を捨ててデッキから「ドラグニティアームズ レヴァティン」を墓地へ送る！」

（きゅっ……！？）

さらばアスラピスク！今来ても少し困るんだ…

「あれ……？試験の時のデッキじゃないんだよな？」

「試験の時のデッキじゃないけど、さっき入れたカードの一枚だ」

十代の疑問に答えつつデッキからさらにレヴァティンを墓地へ送る。

「さてと、俺は手札から「ドラグニティ・レギオン」を召喚、効果により墓地からコルセスカを装備する。そして竜操術により攻撃力は500ポイント上がる。更に俺は竜操術の効果を使い手札から「ドラグニティ・ファランクス」をレギオンに装備する！」

レギオンの右手にコルセスカ、左手に青とベージュっぽい色をした小さなドラゴン、ファランクスが張り付いた。

「ドラグニティ・レギオン」

ATK1200 ↓ 1700

DEF800

本当はこの状況で最適な奴が居るんだが…そう上手く来なかったんだよな…まあいいや。

「これで準備は整ったか……行くぞ十代！」

「おう！来い遊飛！」

……ヤバイ、何かノってきた。

「まずはレギオンの効果発動！自分の魔法・罫ゾーンに存在するドラグニティと名のついたカード一枚を墓地へ送る事で相手の表側表示モンスターを破壊する！俺はファランクスを墓地へ送りプラズマヴァイスマンを破壊！やれ、レギオン！」

「な！？プラズマヴァイスマン！？」

レギオンが殴るように左腕を振り、飛び出したファランクスがプラズマヴァイスマンに突き刺さり破壊した。

…なんか、下級のドラゴン族ドラグニティの扱い荒くないか？；

まあ置いておいてと。

「更に俺は墓地の「ドラグニティアームズ レヴァティン」の効果を発動！自分フィールド上に存在するドラグニティと名のついたカードを装備したモンスター１体をゲームから除外し、手札または墓地から特殊召喚する事が出来る！俺はコルセス力を装備しているレギオンを除外し、墓地からレヴァティンを特殊召喚する！緋炎纏う竜よ、その身に剣を抱き現れる！」「ドラグニティアームズ レヴァティン」！」

レギオンが突然、緋色の炎の柱に包まれたかと思うと、突如頭上から聞こえる雄叫び。そして次の瞬間にはその炎の柱を手を持った長剣で切り払いながら、夕陽に照らされる溪谷にスラッとした緋色の竜が舞い降りた。

「ドラグニティアームズ レヴァティン」

ATK 2600

DEF 1200

「わ……………綺麗ですっ！」

「か、格好良いんだな」

「凄いッス！」

等々感想がちらほら。

まあ、否定はしない。専用フィールドも同然の竜の渓谷に、時刻は夕陽が映える夕方、そこに夕陽を思わせる緋色をしたレヴァティンだし、あんな登場の仕方をするとは思わなかった。俺自身も目が離せなかったし。

「スツゲエ……そいつが遊飛のエースか！」

「ああ、俺の、このドラグニティデッキのエースさ、レヴァティンは」

……まあ、シンクロモンスターも有るんだが、俺はこのレヴァティンが好きなんだよな。元居た世界でもどちらかと言えばレヴァティンを主体にしていたし。

差し詰め、シンクロモンスターは切り札と言った所か……？

「さてと……レヴァティンが召喚・特殊召喚に成功したことにより効果発動！自分の墓地から「ドラグニティアームズ・レヴァティン」以外のドラゴン族モンスターを1体装備カード扱いで装備する事が出来る！俺は………墓地のブランドイストックを装備する！」

墓地から現れたブランドイストックが、レヴァティンの長剣に吸い込まれるように消えていった。

「そして、竜操術によりレヴァティンの攻撃力は上がる！」

「ドラグニティアームズ レヴァティン」

ATK 2600 ↓ 3100

「……攻撃力3100！？」「……」

「しかも、レヴァティンが装備しているブランディストックの効果は確か……！」

「……………二回攻撃」

皆色々驚いてるな……落ち着いてるのは三沢とレインだけだけど、それでも三沢からは驚愕の色が出ている。

「そういう事だ！バトル、レヴァティンでセットモンスターを攻撃！緋竜烈風剣！」

宣言と同時に、レヴァティンが翼をはためかせ風を切りながら一気に接近し、身を翻しながら大きく、縦にセットカードを一刀両断した。

……なんかノリにノって技名言っただけやっぱり恥ずかしいぞこれ……

「くっ……けど、破壊された「フレンドッグ」の効果発動！フレンドッグが戦闘によって破壊された時、墓地から「E・HERO」と名のついたカード一枚と「融合」を一枚手札に加える！俺は「E・H

ERO エッジマン」を選択して融合と一緒に回収するぜ！」

「く、融合を回収されたか……だが、ブランディストックの効果によりレヴァティンでもう一度攻撃！緋竜烈風剣・連風刃！」

「うわあああ！？」

十代：LP4000↓900

こちらに戻らず、その場で一瞬で長剣を逆手に持ち変えたかと思うと、次の瞬間にはレヴァティンが自らの体ごと一回転して十代を真横に切り払った。

……あれやられるとめっちゃ怖そうだな……

「最後に俺は、一枚カードを伏せてターンエンドだ」

遊飛：LP4000 手札 0

フィールド：「レヴァティン」

魔法罫：「竜操術」「ブランディストック」「セット」

フィールド魔法：「竜の渓谷」

さて……ライフ的には有利だが……十代はどうくる……？

「へへ……すげえぜ遊飛。だけど、俺も負けるつもりは無いぜ！俺のターン、ドロー！よし、俺は魔法カード、「強欲な壺」を発動！

デッキからカードを二枚ドロースる！」

げえ！？そういえばこっちじゃ現役だったんだよあの壺！

「よっしゃあ！俺は「E・HERO バブルマン」を召喚！そしてバブルマンが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に自分のフィールドに他のカードが無ければ二枚ドロースる事が出来る！俺は更に二枚ドロースる！」

……………おいおいおいバブルマン原作効果かよ…俺の世界じゃ手札も無いときにしか発動しないんだよなドロース効果……………っていうかどうだけドロースしてんだよ！？

フレンドッグも合わせて、0から一気に5になったよ……………さすがにチートドロースと言われてるだけあるな…

「更に、俺は魔法カード、「天使の施し」を発動！3枚ドロースして二枚捨てる！俺は手札から……………「E・HERO フェザーマン」と「E・HERO エッジマン」を捨てるぜ！」

……………もう何も言っまい。

「そして俺は魔法カード、「闇の量産工場」を発動！墓地から通常モンスターを2体手札に加えるぜ！俺は墓地のフェザーマンとクレイマンを回収！そして融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合！来い、マイフェアリットモンスター「E・HERO フレイムウィングマン」！」

「E・HERO フレイムウィングマン」

ATK2100 DEF1200

手札から現れたバーストレディとフェザーマンが融合の渦に消え、その中から赤い竜の右腕と天使の様な羽を持ったフレイムウィングマンが現れた。

……きたか、十代のフェイバリット、フレイムウィングマンが。

「フレイムウィングマン…そいつが十代のエースか…だが、攻撃力はまだレヴァテインの方が上だ！」

「まだ終わらないぜ！俺は更に手札から「R ライトジャスティス」を発動！自分フィールド上の「E・HERO」の数だけフィールド上の魔法・罠カードを破壊する！俺が破壊するのは「竜操術」とセットカードだ！」

「くっ！？」

ライトジャスティスによって竜操術とセットしていた「聖なるバリアイミラーフォース」が破壊されてしまった。

「そして！俺はフィールド魔法、「摩天楼 スカイスクレイパー」を発動！」

十代がフィールド魔法、スカイスクレイパーを発動した事により、夕陽の渓谷は姿を消して、変わりに高層ビルが建ち並ぶ夜の世界になった。それと同じように、時刻も夕陽が沈み夜が訪れかけている。

……ここでスカイスクレイパーとか…

「バトル！フレイムウィングマンでレヴァティンを攻撃！更に、スカイスクレイパーの効果発動！「E・HERO」と名のついたモンスターが戦闘をする時、相手モンスターより攻撃力が低い場合100ポイント攻撃力が上がる！行け、フレイムウィングマン！スカイスクレイパー・シュート！」

「フレイムウィングマン」

ATK 2100 ↓ 3100

「くっ！」

遊飛：LP 4000 ↓ 3500

摩天楼の遥か頭上から、フレイムウィングマンが一気に降りてきて放った炎がレヴァティンを捉えて破壊された。

「更にフレイムウィングマンの効果発動！戦闘によってモンスターの破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「く、うわっ！？」

そして目の前にフレイムウィングマンが現れて火炎放射を受けてしまった。

遊飛：LP 3500 ↓ 900

「最後にバブルマンで攻撃！バブル・シュート！」

「ちい！？」

遊飛：LP900↓100

「ターンエンドだ！」

十代：LP900 手札 1

フィールド：「バブルマン」「フレイムウィングマン」

魔法罫：無し

フィールド魔法：「摩天楼 スカイスクレイパー」

まったく……ここまで詰んでる状況は久しぶりだな。

手札も無し、場も無し、フィールド魔法も無し。

「だけど、凄く楽しいんだよなこれが……俺のターン、ドロー！
………全く……ターンエンドだ」

遊飛：LP100 手札 1

フィールド：無し

魔法罫：無し

「俺のターン、ドロー！へへ、遠慮なくいくぜ、遊飛！」

「ああ……来い、十代！」

「フレイムウィングマンでダイレクトアタック！スカイスクレイパー・シュート！」

「く、うわっ！？」

遊飛：LP100↓0

「ガッチャー！楽しいデュエルだったぜ！」

「ふう…………俺も楽しかったよ、十代」

お馴染みの決め台詞を決めている十代を見て、本当に楽しかったなと思う。

…………負けたのはくやしいけど。

「……………ほえ…………」

「凄いッス！兄貴も凄かったけど遊飛君も凄かったッス！」

「そうなんだな」

「……………（こくり）」

「ふ、良いデュエルを見せて貰ったよ……………ところで高原、最後にドローしたカードは何だったんだ？」

と、いままで見ていた皆からも感想を頂いていると（一名呆けているけど）三沢に最後にドロ―したカードを聞かれた。

「ん？ああ、このカードか」

「ふむ……「地縛神の復活」？」

「ああ、手札を一枚捨てて、自分の墓地からフィールド魔法と「地縛神」と名のついたモンスターを回収できる魔法だよ……悪く無いカードだけど、まさかあの場面で引くとはなあ……」

ま、こればかりは仕方ないか。

そしてこの日は、この後は飯の時間と言う事で解散することになった。

アカデミアで初めてのデュエルには負けてしまったけど、本当に遊戯王の世界に来たんだなど、実感したデュエルだったな……

続く…

第四話・悠然たる溪谷とそびえ立つ摩天楼。（後書き）

…これでいいはず、十代…！orz

そして普通の会話も調子良く書きたい…

色々と行き当たりばったりな小説ですが、よければまた次回もお目通しお願いします。

あと、そろそろ設定を出すべきか…

それではまた次回。

第五話・夜の密会と衝動。（前書き）

どうも、今回はいつもよりちょっと長いです。

では、ごきげん。

第五話・夜の密会と衝動。

「……………いや、でもな…うーん、違う違う…」

現在位置、アカデミア校舎内の教室。

いわゆる座学の時間である。

「えゝ……………いや……………あゝ、くそ、だめだめ…」

早いもので、レッド寮裏でデュエルした日からだいたい一週間と少しくらい経っていた。

「……………やっぱりこれを一枚にして……………いやでもそれだと…」

その中で、デュエルアカデミアと言ってもデュエルの事だけ学ぶんじゃなく、一応普通の授業もあった（まあそれでも間違いないくデュエルの方の比率が高いが）。

「……………そうだ、これがあつたか……………だとすると……………」

……………そんな学生生活を堪能してる俺が授業中にも関わらずぶつぶつと独り言を呟いてしている事はもちろん勉強。

なんて事はなく、適当なメモ帳にデッキリピを書いていた。
今朝目を覚ましてから、どうしても直ぐに作りたくなったデッキリ
ある。

そして作ろうと思ってしまつと他の事に身が入らなくなってしまう
俺は一時限目から現在——最後の授業までずっと頭の中でデッキリ
を回してはメモ帳と格闘するということを繰り返していたりする。

のだが……

「あゝ、だめだ……うーん……」

いくら考えても、ある程度にしか形にならないのである。

「……………ふう、まあそんなに詰めても仕方ないか…帰ってからま
た考えますかね……」

仕方なく一段落つけて、ふと周りを見てみる。

十代——爆睡。

翔——何か浮かれてる。

隼人——眠りかけてる。

三沢——真面目に受けてる。

レイン——多分ばーっとしてる。

ゆま——ぐっすり寝てる。

委i…麗華——当然真面目に受けてる。

……三沢と委員長しか真面目に受けて無いよ…ていうかも委員長で固定しちゃってるよ俺も…

ちなみに、その委員長こと原 麗華とは既に十代達を含めて自己紹介等は終えている。

良く授業で寝てたりする十代を注意したりするが、険悪になる事も無いので心配は無いと思っている。

しかし、かなり後ろの高い席だから色々見渡せるなここ。

えーと…あ、明日香居た。おまけで取り巻きの二人も。そしてその近くを見れば万丈目が居たよ…同じく取り巻き引き連れてるし。

「……………では、今日教えた所は明日の試験で出るからな。それでは今日はここまでだ」

ちようど良く授業が終わったよ……………しかし明日、試験か…ま、何とかなるか。

とりあえず十代達の所へと行く。

「おい、起きろ十代。もう授業終わったぞ」

「……………う…え…終わったのか？」

「さつきな。それと隼人も起きろー」

とりあえず二人を起こす。

「ふふ……試験なんて…今の僕なら楽勝っス…ふふふ……」

………うん、何か翔が色々ダメになってるな。

「うわ、翔の奴まだあの調子なのかよ」

「淒く…不気味なんだな」

「同意だな……それと二人とも、明日テストらしいけど大丈夫なのか？」

「ま、何とかなるだろ。それより実技が楽しみだぜ！」

「………不安なんだな……」

「………まあ頑張れ、二人とも」

俺に出来る事なんて何も無いしな、こればかりは流石に。

「とりあえず帰るか。特に用事がある訳でもないし」

「ふふ……ふふふ………」

十代、隼人、翔と共にオシリスレッド寮に帰る事にするが…

…やべえ、淒く不気味だ………うーん…何かあったっけ、この時期………

「夜、オシリスレッド寮・自室」

「うーん……思ってたよりカードが少ないか…参ったな」

放課後、寮に戻った後に早めの晩飯を食べてから俺はずっとカードと格闘していた。

とりあえず授業中に大体は構成を考えていたので、その通りに組んでいたのだが、予定よりカードが足りないという事態になっていた。

「…ふむ…まあ、元から持ってなかったカードがほとんどだったし文句は言えないか……足りない分は適当に汎用性が高いカードを入れてと…」

持ってるのは…と言うかこっちに來た時に増えたカードにあったのは覚えてたけどなあ。てっきり全部3枚ずつあると勘違いしちゃった。

「えーと………こんなもんか」

そして、とりあえず40枚になったカード達を見してみる。

.....

「なんて言うか.....俺らしいと言うか、相変わらず変な構成になったな。試作だけだ」

自分で見た感想がこれである。

.....元居た世界でも、よく友人に言われてたな...お前のデッキ内容は、間違っていないけどおかしいとか...

「きゅ？」

「ん？.....ああ、ちょっと考え事を、な.....」

何かを感じたのか、アスラピスクが実体化して机の片隅に現れた。

...はあ.....まったく、これは俺らしくないな...

「...ま、ここを生きていくしかないんだよな...結果的にとはいえ自分で選んだに違いないんだから」

「きゅう...」

作ったばかりのデッキを纏め、一応ちゃんと混ざる様にシャッフルしてから新しく開けたデッキケースに入れておく。

.....あれ？...なんか同じデッキケースばかり使ってるせいかな、どのケースに何のデッキが入ってるか分からなくなってきたぞ...

「……うん、今度シールでも貼つとくか……さてと、明日は一応テストだしさっさと寝ようk「遊飛！俺だ開けてくれ！」ん？なんだ十代か？」

と、そろそろ寝ようとしている所にドアをたたく音と一緒に十代の声が聞こえてきた…なんだ、もう夜なのに。

「よつと…どうした？十代？」

「大変だ！翔がさらわれたんだ！」

「な、何だっ（ry」

さらわれたつてどういう……あ！そうかあの話か！？

「頼む遊飛！とりあえず力を貸してくれ！」

「そう言う事なら分かった！ただ一度落ち付け十代、とりあえず入れすぐ準備する」

とりあえず十代が頼って来たのだから受けない理由は無いので、すぐにオシリスレッドの制服の上着を着込む。

「えーと……あ、ちくしょう鍵どこ行つた」

「きゅっ！」

「クリクリっ！？」

「うわ！？アスラピスクまたか！？」

と、俺が力ギを探しているうちにアスラピスクが精霊状態の十代の精霊、ハネクリボーを追いまわし始めた。

ちなみに、十代にはアスラピスクの存在はすぐにバレた。ハネクリボーが見えるのだからアスラピスクが見えても不思議じゃないけど、その時からアスラピスクはハネクリボーを見る度に一回は追い回しているのだ。しかも絶対ハネクリボーが必死で逃げるのを楽しんでいると思う。

「ああもう、どこ行つた……あ、くそ、面倒な所に……ええいアスラピスクお前ちよつとデッキ後1個選んどけ一応持つてく！悪いけど十代受け取つといてくれ！」

「きゅー！」

「お？これか？」

ベッドの隙間から落ちていた鍵をとり、十代からデッキを一つ受け取り先ほど作つたデッキと受け取つたデッキ、そして地縛神のデッキを手早くベルトに着けて準備を整える。

「よし、行くか！場所は何処だ？」

「オベリスクブルー女子寮・裏」

「……………無いわー」

「だから誤解っス！」

わざわざ小舟で湖を渡って女子寮の裏に来てみると、指定通りに明日香が居た。後取り巻き二人——確かジュンコとももえだったかが居た。そして何故かゆまと驚くべき事に委員長まで居た。最後にグルグル縄で巻かれて転がされてる翔。

そして話を聞いてみるとやっぱりあの事件……………翔の覗き事件であった。

「全く、翔、なんでそんなうらやmトンデもない事をしたんだ？ 今ならまだ間に合うし自首の方が罪は軽いぞ？ 世間の目は知らないけど」

「うう……………と言つか今どさくさ紛れに何か言ったような気がするっス…」

ま、一応俺だつて、ねえ？

「と言うわけでデュエルよ！ 十代！」

「へへ、受けて立つぜ！」

お、あつちは話が纏まったみたいだな。そして流石のデュエル脳だ、犯罪もバッチリ解決してくれるよ。

「まああつちの二人は置いておいて………ゆまはまだしも珍しいな、こついう場所に、しかもこんな時間に委員長が居るなんて」

「一応、私もその時居ましたので。当事者としては最後まで見届ける義務がありますからね」

「なるほどね………と言うことはゆまも居たのか？」

「はいっ！でも、私は翔君はそんな事しない人だって信じてますからっ！」

「うう、ゆまさんだけっスよ僕を信じてくれたのは………これが優しさなんスね……」

翔が涙ぐんでいる。ただしミノムシ状態で。

「全く………」

その後、適当に雑談しながら十代と明日香のデュエルを観戦していた。はつきり言って完全に野次馬のポジションである。

いや、まあ呼ばれたのは十代だけだったし、仕方ないよな、うん。

しばらくそんな感じでデュエルを見ていたが、しばらくすると十代が、多少手順は違っていたがほぼ原作通りにサンダー・ジャイアントを召喚して勝利した。

「おー、相変わらず十代の引きは強いな」

「ですが、もう少しあのやる気を授業にも出して欲しいものです」

「実技なら出すと思うけどな……………さてと、ほら、翔は返してもらっぞ」

「あ、痛！？ちょっと遊飛く、引きずらないで欲しいっス！」

とりあえず、転がっていた翔を引きずって十代の所まで行く事にした。

「ほら、取り返してきたぞ」

「お、サンキュー遊飛！」

「うう、アニキーっ！ホントに助かったっス！」

「さてと、用事は済んだし帰るか…翔が世話になったな」

とりあえず、翔の縄は…いいか、まだこのままで。

「待ちなさい、高原 遊飛」

「ん？なんだ？」

とりあえず翔を持ち上げて子船に投げ込むかと考えていた所に明日香から待ったが掛かった…え？俺なんかした？

「私とデュエルしなさい。それに、返すとは言ったけど何も言わな

「いとは言っていないわ」

「えー！？あんまりっス…」

「ふむ……」

ジツと明日香をしてみる。

「……分かった。そのデュエル受ける………」
「……たたく、素直に実力を確かめたいと言えばいい物を……」

「おお！…へへ、遊飛、明日香は強いぜ？」

「分かってる」

「ん？　というかいつの間に名前で呼ぶようになったんだ？　さっき俺が翔を回収してた時か？」

「まあいいか……さてと、デッキは……」

ベルトに付けているデッキケースを確認していく……えーと、じゃあ早速さっき作ったのを……いや、楽しみは取っとくか。

「まあこっちのデッキ次第だな……えーと……」

……ん？……なあ十代」

「ん？どうしたんだ？」

「いや……このデッキ、アスラピスクが選んだので間違いないんだよな?」

「ああ、確かにそれだぜ？わざわざ自分で外してたしな」

「ふむ…いや、ならいいんだ」

うーん…まあいいか。アイツも意外と気まぐれな所があるし。

とりあえず少し前に出て、既に準備を終えている明日香に相對する。

「さてと、それじゃあ始めるか」

「ええ…始めましょう」

「「デュエル！」」

遊飛：LP4000

明日香：LP4000

「先攻は貰う、ドロー！」

とりあえずさつさと宣言して先攻を頂く事にした……………うん、ここ数日かで慣れたよこのルール。まさかマジで言ったもん勝ちだとは…一応そついう機能もあるのに…

「さてと……………まずまずか、モンスターを1体伏せて、カードを一枚セツト。ターンエンドだ」

遊飛：LP4000 手札4

フィールド：「セット」

魔法罫：「セット」

フィールド魔法：無し

まずは手堅く様子見する……本当はそういうデッキでは無いのかも知れないが、手札にちょうどいいカードが無いし。

「なら私のターン、ドロー！私は「ブレード・スケーター」を召喚！」

「ブレード・スケーター」

ATK1400 DEF1500

明日香のフィールドに、スケート選手を思わせるモンスターが現れた。

「バトル！ブレード・スケーターでセットモンスターを攻撃、アクセル・スライサー！」

クルクルと回転しながら、一瞬でブレード・スケーターがセットモンスターを破壊した。

「く、破壊された「氷結界の番人ブリズド」の効果発動！戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、デッキから一枚ドローする！」

「氷結界……？……ドラグニティじゃない？」

「あいにく、デッキは幾つも作る主義なんだね……その様子だと、俺はドラグニティ使いつてなってるみたいだな」

「ええ。墓地からモンスターを装備して戦うドラグニティ使いで、十代以外には負け無しのレッド生とも呼ばれてるわ」

なるほどなるほど……確かに、ここ数日は実技でも、誰かに挑まれた時も全部ドラグニティだったから当たり前か。

「……しかし、確かに十代には勝ってないけどさ……まあいいや。まだそっちのターンだな」

「ええ。私は……2枚カードをセットしてターンエンドするわ」

明日香：LP4000 手札3

フィールド：「ブレードスケーター」

魔法罫：「セット」×2

フィールド魔法：無し

ん……少し悩んだか？見たことの無いデッキだから警戒したのかも……
しれないな……

「俺のターン、ドロー！」

手札はブリズドのおかげで6枚か……ふむ。

「……ん？……おいおい、この組み合わせは……」

そして手札を確認して、ドローしたカードを含めると手札がかなり

良いことに気付いた。ただ、フィニッシャーが居ないが…

「そうだな…まず、俺は「氷結界の舞姫」を召喚！」

「氷結界の舞姫」

ATK1700 DEF900

フィールド上に、雪の結晶と共に青いマフラーを着けた女性が現れる。

「そして、舞姫の効果発動！1ターンに一度「氷結界」と名のついたモンスターを任意の数手札から見せることで、相手フィールド上にセットされた魔法・罠をその枚数分だけ手札に戻す！俺は手札から「氷結界の武士」と「氷結界の御庭番」を見せてその二枚を戻す！」

「何ですって！？なら、チェインしてリバーズカードオープン、「和睦の使者」！このターン受ける戦闘ダメージを0にし、更に私のモンスターはこのターン戦闘では破壊されない！」

「げ、ここで和睦かよ！だけど、もう一枚は戻させて貰う！封冷の舞！」

和睦を発動されてしまったが、舞姫がヒラヒラとマフラーをたなびかせながら踊り明日香のセットカードが凍りついた。

「そして手札から魔法カード、「氷結界の三方陣」を発動！手札から「氷結界」と名のついたモンスターを三種類見せて相手フィールド上のカードを破壊し手札から「氷結界」と名のついたモンスターを特殊召喚する！俺は手札からさっき見せた武士と御庭番、そして

「氷結界の破術師」を見せてブレード・スケーターを破壊！そして俺は破術師を守備表示で特殊召喚する！」

「くっ！？」

フィールドに先ほど見せた三体が現れたかと思うと、その三体の中央から光が放たれブレード・スケーターを破壊、更にその光が消えるとフィールドに長く青みがかっている銀髪に舞姫と同じようなマフラを着けた破術師が居た。

「氷結界の破術師」

ATK400 DEF1000

「そして、この瞬間から破術師の効果が適用…… フィールド上に破術師以外の「氷結界」が存在する限り、お互いに魔法カードはセットしなければ発動できず、セットした次の自分ターンが来るまで発動する事は出来ない！」

「なっ！？」

「俺はこれでターンエンドだ」

遊飛：LP4000 手札 3

フィールド：「舞姫」「破術師」

魔法罫：「セット」

フィールド魔法：無し

「視点変更、麗華」

「どうやら、高原君の使っている「氷結界」というデッキは、相手の魔法や罠を封じながら戦うデッキの様ですね」

フィールドを見て、今高原君が説明した内容を考えて推察してみます。

まだ、モンスターは二枚しか使ってませんがどちらも魔法・罠に関する効果。十分可能性は有ります。

「……もしそうなら、私はあのデッキを使っている高原君とはあまりデュエルしたくはありませんね……」

「え、何でっ？」

「先攻を取れば問題はあまり無いですが、私のデッキは魔法や罠を重視していますから……それに、今の状況は天上院さんにとっても辛いですね」

疑問に答えながら、わかっている様でわかっていない事が多い宮田さんなので、詳しく説明してみましようか……

「今の状況、あの「氷結界の破術師」というモンスターで魔法をセツトし、尚且つ次のターンで無ければ発動出来ない。そして「氷結界の舞姫」というカードによって手札に戻させる。完全に魔法力」

ドを封じた上に、攻撃反応型のトラップカードも封じています。」

「だけど、なら戦闘で倒しちゃえばいいんじゃないかな？」

「そうですが……高原君のセットカードと天上院が破壊系のトラップを入れているかどうか……と言った所ですね」

しかし………明日はテストと言うことを、皆さんわかっているのでしょうか……まあ、私も遊城君や高原君のデュエルには興味があつたのであまり強く言えませんが……

〈視点変更、遊飛〉

「く……私のターン、ドロー！」

さて……今の状況はかなり明日香にとってマズイ状況だけど、どう出てくる？

「私はエトワール・サイバーを召喚！そしてバトル、エトワール・サイバーで氷結界の破術師を攻撃！」

む、ダメージを覚悟で潰しにきたか……なら！

「リバースカード発動！『聖なるバリア ミラーフォース』！相
手攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

「く……やるわね……私はカードを一枚セットしてターンエンドよ……」

明日香：LP 4000 手札 2

フィールド：無し

魔法罫：「セット」

フィールド魔法：無し

このまま押しきれるか……？

「俺のターン、ドロー！」

………おいおいおい何だよ今日は……明らかにタイミング良
すぎるだろ……

「まず、俺は舞姫の効果を発動！手札から『氷結界の武士』を見せ
てセットカードを手札に戻す！」

「く………」

………よし、サンダー・ブレイクとかじゃなかったか……な
ら、明日香には悪いけど一気に倒す！

「そして俺は舞姫と破術師をリリじゃなくて生け贄捧げて『氷結界
の虎将 グルナード』を召喚！」

「氷結界の虎将　グルナード」

ATK 2800　DEF 1000

「攻撃力……2800…!？」

「悪いけど、このターンで終わらせる！グルナードの効果発動！このカードが表側表示で存在する限り一度、自負のメインフェイズに一度だけ通常召喚とは別に「氷結界」と名のついたモンスターの召喚を行う事が出来る！俺はこの効果で「氷結界の武士」を召喚！」

「氷結界の武士」

ATK 1800　DEF 1500

「そんな……1800…っ！」

フィールド上に、蒼色の鎧を纏ったグルナードとそれより薄い青色の甲冑をつけた武士が立ち並ぶ。

「バトル！グルナードと武士で、ダイレクトアタックだ！」

「っ…きゃああ!？」

明日香：LP 4000 ↓ 0

武士、そしてグルナードの攻撃が明日香に襲いかかり、一気にライフを0にした。

……あ…やっちゃった。

「そんな……」

「明日香様が……１ターンキルされるなんて……」

何か居心地悪いぞ……うぐぐ……

「……ふう……流石ね。私の完敗よ」

「ああ……いや、単純にデツキの相性と運が良かっただけさ」

「それでも勝ちも勝ちよ、高原 遊飛」

「……まあ、そういう事にしといてくれ。後、俺も遊飛で良いからな」

「ふふ、なら私も明日香で良いわ」

「りょーかい、よろしくな明日香」

「遊飛！やったな！」

「おう！………て、翔はまだミノムシなのかよ……」

「いい加減苦しいっす……」

デュエルが終わり十代の方を振り向いたら翔が未だにミノムシだった………十代、せめてほどいてやれよ……

「はあ………皆さん、終わったみたいですし、そろそろ戻りましょう。忘れてないとは思いますが、明日は試験ですからね？」

「「「「「……あ「「「「」

俺、明日香、委員長以外がそういえばといったように呆然としていた。

「……………はあ……」

「と、とにかく帰るか……じゃあんぐえっ!？」

何とも微妙な空気が漂い、とりあえず帰る事にしようと歩き出したのだが、木の枝が何かに引っ掛かったのか思いつきり腰が引っ張られるようになってしまった。

「ぷっ」

「おい翔今笑ったな? 十代、このまま投げ入れるぞ?」

「え、ちよっ、やめて欲しいっスってアニキもそんな、うわ、わゝゝっ!？」

「全く……それじゃ、また明日な」

「じゃあな!」

そして、まだこちらを見送っている女子に別れを告げてそそくさと十代と二人で小舟を漕ぎはじめて帰ったのだった…

〈視点変更、ゆま〉

「…………ふう、それじゃあ私達も帰りましょうか。委員長達も、付き合わせて悪かったわね」

「いえ、私も関係者でしたので……………ですが、明日の事をもう少し考えて欲しいですね」

「う、悪かったわよ」

遊飛君達がボートで帰って行くのを見送った後、私達も帰る事になりました。

……………あうつ…眠いです…

「あうつ……………うつ…ん？」

あれ？あれって…

「あら？どうしたのゆま？」

「えーと……………あ、落とし物ですっ」

私が気になる物を見つけて離れたのを見て、明日香さんが声を掛け

てくれました。

「デッキケース…？」

「それは……確か高原君がよく使ってるデッキケースですね……
宮田さん、知り合いの物とはいえ勝手にみたらダメですからね？」

「あうっ」

うう…一瞬だけしか考えてないのに何で解るんだろ…

「そうね…よければあなたから遊飛に渡しておいたらどう？良くあなた達は一緒にいるみたいだし」

「そうですね。なら、宮田さんお願いしますね」

「え？あ、えーと……はいっ」

「……………見たらダメですからね？」

あう……

続く…

第五話・夜の密会と衝動。（後書き）

……なんか詰め込み感有りまくりですね、そして明日香ファンの方色々すまないです；

遊戯王の小説は、デュエルパートが難しいと実感しはじめるこの頃です……そしてあれこれ調べるだけで時間が消えていく；

さて、こんな小説ですがまた次回もよろしくお願いします。

それでは…

第六話・試験、彼女達の出会い。(前書き)

先に一言…一応、またもや一部キャラ崩壊に注意です…

と、とりあえずどうぞ！

第六話・試験、彼女達の出会い。

ピピピピピピピピピピピピピピピピ

「あつ……………むにゃ…」

ピピピピピピピピピピピピピピピピ
シリシリシリシリシリシリ

「みゆ……………ふぁ……………」

ピピピピピピピピピピピピピピピピ
シリシリシリシリバチッ…………

「ん……………うう……………？……………あああああああ！？」

ガサガサシルシルシルバタバタ

「えと、デッキ、あとディスク、えとカバンにメモにペンに、あわわわわわ」

バタバタドタダガチャガチャ

「うあ！？寝癖が！わわわわわ、あ、そうだ遊飛さんのも！」

バタバタバタバタガラガラバタンッ

「ね、寝坊したあ……………！！！」

…… 人気の無くなった女子寮を、悲鳴をあげながら飛び出して行った茶髪の少女がいたそう。

「アカデミア校舎内、デュエルスペース」

「もうダメですきつと留年ですダメダメなんですっ……」

「そんな大げさな…まだ一ヶ月経ってないんだし」

結局、筆記のテストに遅刻してしまった私——宮田 ゆまです。

今はお昼休みで、ちょうど残ってた遊飛君や十代君、それに翔君と一緒にです。

「それに……朝っぱらから神頼みしてた翔とか大遅刻して寝た十

代に比べればまだマシだと思うし」

「へへ、でも次はデュエルなんだろう？楽しみだぜ」

「アニキが羨ましいっス…」

確かに…テストなのにいつも通りデュエルを楽しみにしてる十代君がちよっと羨ましいや…

「まあ十代だからな。ちなみに翔とゆまはどうなんだ？」

「うっ……自身無いっス…」

「私もだよっ……何回もデッキ作りなおしたりしたんだけど、上手く出来なくて……」

「ふむ…まあ、それこそまだ一ヶ月も経ってないんだ。これから良くなっていくさ…誰だって、最初から上手くいくとは限らないしな」

「あう…そう、だよねっ……あ、そうだ遊飛君。昨日あの後、デッキ落してたよっ」

危ない危ない、デッキの御話をしていなかったらそのままずっと忘れてたかもっ…

「ん？あ、やっぱり落してたか…朝さんざん探したのに見つからなかったから、まさかなと思ってたんだけどさ」

とりあえず、持ち歩いていたバッグの中から遊飛君のデッキケースを出して渡しておきます。

「ふう、これでやっと安心できる……まったく、もしかして引っ掛かった時か？新品の筈なのに……」？」

「あれ？それもしかして遊飛君のじゃない？」

「いや、間違いなく俺のだけど……ふむ……」

「??…あ、そろそろ始まるみたいだねっ」

「では、これより試験を開始します、まず――」

次々と名前が読み上げられていきます。

あうっ……やっぱり不安になってきますっ……

「うう……あ……ディスク付けておかないと」

バックからディスクを出してと……

「宮田 ゆまさん。3番フィールドへ」

「は、はい！ちょっとまってください！」

え、えーと奥の方に……あれ？あれれ？……ならこっちな……ええ？

「あれ……嘘……」

「……?どうしたんだ？」

「無い……デッキが…無いんですっ…」

「「え？えー（っス）！？」「」」

あうう…そう言えば……途中まで意識してたけどバッグの中に入れたかあまりはつきりと思い出せないや……

「それってヤバくないか？」

「ヤバいつて所じゃないっス！」

「落ち付け、とりあえずディスクとかに入れてたりは？」

「あ……ううん、入って無い……」

「こうなったら、先生に言つて後に回してもらうしかないっス！」

「あうう……それしかないよね……」

「ふむ……そうだな……なら、このデッキ使ってみるか？」

「え？」

遊飛君が何かとんでもない事を言ってきました。

「で、でも…やっぱり自分のデッキじゃないし…遊飛君のデッキってまだ分からない事たくさんだしっ……」

「デッキ忘れたなんて言ったら減点も凄いだろうし、なら分からないくてもデュエルした方がいいとは思っぞ？………それに「

高原 遊飛君、6番フィールドに来てください」げ、マジかよ…今
行きます！」

「えと、遊飛君、そのデッキ」

「ああもう、あーだこーだ言えないし、やるだけやってみるといい
さ……そうだな、エクストじゃないんだよな融合デッキを見とくと
いい。じゃ、頑張れよゆま」

「あ、ちょ、遊飛君っ!？」

半ば強引に遊飛君が自分のデッキを押し付けて指定されたスペース
に走っていきました……

「あうっ…どうしよう…」

「まあ、遊飛がああ言ってたんだしここは使ってみようぜ？」

「宮田 ゆまさん！よろしいですか？」

「ひう!?!は、はい!！」

あうっ、何かとんでもないことになっちゃったよう…

「とりあえずファイトっス！」

「応援してるぜ!！」

声援を受けながらばたばたと3番スペースに走っていく。

思わず返事しちゃったけど……やっぱり不安だよお……

「あ、えと、すみません、遅れました!」

「何か問題でもありましたか?」

う……

「えと……ちょっとデッキを……」

「ふむ……どうやらあらかじめセットしていなかったみたいですね。まあいいでしょう、ではデッキをセットして始めてください」

「え?あ……はい」

なんか勘違いされちゃったよっ……うう、ここまで来たらするしかないよね……

とりあえず……さっき渡された——返したばかりだったデッキをデスクにセットして……あ、そういえば融合デッキを見ろって言うってたっけ……

「えーと……え……これって……?」

……」

「ふふ……そろそろ準備はいい?」

「え、あ、すみませ……えー……!?!?」

自分の反対側、多分試験の相手の人のであろう声に慌てて返して、

初めて確認したけど……

「あら……そこまで驚かなくてもいいじゃない」

薄い紫色の髪、

長めのツインテール、

特徴的な赤い眼。

うう……運が悪過ぎるよお……よりによって、

「アカデミアの女帝」なんて呼ばれてる藤原 雪乃さんが相手なんて……

「あ、えと、ごめんなさい……」

「まあいいわ。それじゃ、始めましょう」

あうう………はじめて話したけど、なんかこの人苦手かも……それに、大人っぽいつて言うか、同じ学年には見えないや。

と、とにかく、ここまで来たんだから私ができる事をしてみようっ！

「えと、よろしく願いします！」

「デュエル！」

ゆま：LP 4000

雪乃：LP 4000

「ん、先攻は私ね、ドロ……私は「マンジュ・ゴッド」を攻撃表示で召喚、効果によってデッキから「終焉の王 デミス」を手札に加えるわ……そしてカードを1枚セットしてターンエンド」

雪乃さんのフィールドに、あり得ないくらいの腕を持ったモンスターが現れました。

雪乃：LP 4000 手札5

モンスター：「マンジュ・ゴッド」

魔法罫：「セット」

フィールド魔法：無し

「私のターンです！ドロ！」

えと……手札は……

「あう……と、とりあえず、私は

「E・HERO エアーマン」を、召喚します！」

宣言と同時に、風を巻き起こしながら青いHEROが姿を現しました。

「E・HERO エアーマン」

ATK1800 DEF300

「E・HERO」…？」

「えと、召喚・特殊召喚に成功した時…でいいんだよね、効果発動！自分のデッキから「HERO」と名のついたモンスターを1体手札に加えます！私は……」

う…どんなのがあるかわかんないよ……仕方ないから、一度デッキをディスクから抜いて選ぼう…

「えーと…………見たこと無いカードばかりだっ…」

遊飛君から渡されたデッキ…多分、「E・HERO」何だろうけど…
…十代君のデッキとは全く違っって言うか、見たこと無いカード
がいっぱいだよ…

「あ…………このカード良いかも…うん、私は「E・HERO フォ
レストマン」を手札に加えます！そしてバトル、エアーマンでマン
ジュ・ゴッドを攻撃です！」

「んう…………ふふふ」

雪乃：LP4000↓3600

「えっと、カードを1枚セットしてターンエンドです」

ゆま：LP4000 手札4

モンスター：「エアーマン」

魔法罫：「セット」

フィールド魔法：無し

「では、ドロー…………そうねえ、私は儀式魔法「奈落との契約」を
発動。手札から「終焉の王 デミス」を生贄に「闇の支配者 ゾー
ク」を召喚するわ」

「闇の支配者 ゾーク」

ATK2700 DEF1500

現れるのは、禍々しい雰囲気をもった悪魔……ちよつと怖いです…

「そして、ゾークの効果を発動するわ。1ターンに1度、サイコロを振る事で出た目に応じてフィールドのモンスターを破壊するわ…
…1・2ならあなたのモンスターを全て、3・4・5なら1体、6なら…うふふ、私のモンスターを全て破壊するわ。さあ、効果発動よ」

…え？それって、ほとんど確実じゃ…なんて思ってるうちにフィールドにサイコロが現れて転がり始めちゃったよ…

「……出た目は、「4」ね。効果によりエアーマンを破壊、そしてゾークでダイレクトアタックよ……ダーク・カストロファイ」

「あ、リ、リバースカード発動！「リビングデッドの呼び声」！効果で墓地からエアーマンを攻撃表示で蘇生して、更に効果でデッキから……「E・HERO ボルテック」を手札に加えます！」

「それなら、ゾークでエアーマンを攻撃よ」

「きゃう！？」

ゆま：LP4000↓3100

「このままターンエンドするわね」

雪乃：LP3600 手札3

モンスター：「ゾーク」

魔法罫：「セット」
フィールド魔法：無し

「私のターン…ドローっ！」

うう…せめて融合さえ引ければなあ……って、このカード…

「…これ、なら…私は、「E・HERO アイスエッジ」を召喚します！」

フィールドに、小さなトゲトゲした少年のようなHEROが現れます。

「E・HERO アイスエッジ」
ATK800 DEF900

「そして、アイスエッジの効果を発動です！メインフェイズ1に手札を一枚捨てて直接攻撃する事が出来ます！私が捨てるのは…」「E・HERO オーシャン」です！」

「あら…何を仕掛けてくるのかしら？」

あう…何かあるって読まれてる……だけど、ここまでしたら使うしかないっ！

「私は……更に魔法カード「ミラクル・フュージョン」を発動します！フィールドか墓地から、決められたモンスターを除外して「E・HERO」と名のついた融合モンスターを融合デッキから特殊召喚します！」

「フィールドと…墓地から…っ」

「私が除外するのは、墓地のエアーマンとさっき捨てたオーシャンです！そして、融合デッキから召喚するのは……」「E・HERO
アブソルートZero」！」

瞬間、パキパキと、まるで全ての冷氣が一か所に集まる様にフィールドが凍っていきます。

そして、それが一段と激しくなったその瞬間、氷が碎ける音と一緒に白いマントを付けた、氷のHEROとも言うべきモンスターが現れましたっ！

さっき融合デッキを見た時に、特に目を惹いたカードの一枚です……それにどことなく、アイスエッジが成長したようにも見えます。

「E・HERO アブソルートZero」
ATK2500 DEF2000

「そして更にZeroの効果発動です！このカードの攻撃力はZero以外のフィールド上の水属性の数だけ、攻撃力が500ポイント上がります！今は他にアイスエッジしかいないけど、それでも攻撃力は3000ですっ！」

「E・HERO アブソルートZero」
ATK2500 ↓ 3000

「ゾークを上回った！？」

「バトル！Zeroでゾークを攻撃……瞬間氷結＞Freezing at moment<！」

「くっ、いけない子ね！リバースカード発動、「攻撃の無力化」！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるわ！」

手が刃へと代わり、ゾークに攻撃を仕掛けようとしたZeroだと無力化によって止められてしまいました…

「あう…このままターンエンドですっ」

ゆま：LP3100 手札2

モンスター：「Zero」「アイスエッジ」

魔法罫：無し

フィールド魔法：無し

「ふふふ…楽しくなって来たわね…ドロ。私はゾークの効果を發動するわ」

再び、サイコロが現れました………出た目は…

「あら、出た目は「1」ね…あなたのフィールドのモンスターを全て破壊するわ………えっ!？」

ゾークによつて、Zeroとアイスエッジが破壊されてしまいました………ですけど、その瞬間Zeroがゾークに向かって幾つもの氷の破片を放って破壊した事に雪乃さんが驚いています。

「Zeroがフィールドを離れた事によって最後の効果が発動します！フィールドを離れた時、相手モンスターを全て破壊するんですっ！」

「っ…そんな効果が…なら、私は「死者転生」を発動。手札から「ソニックバード」を捨てて「終焉の王 デミス」を手札に加えるわ……そして、私は「高等儀式術」を発動するわ。デッキから「デユナミス・ヴァルキリア」と「デーモン・ソルジャー」を墓地へ送り回収したデミスを召喚」

「デミスっ…」

雪乃さんのフィールドに、大きな斧を持った仮面をかぶった人型のモンスターが現れます……たしか、雪乃さんのデッキの切り札とも言われていたはず…

「終焉の王 デミス」

ATK2400 DEF2000

「ふふ、バトルよ…デミスでダイレクトアタック！」

「ひゃうっ!？」

ゆま：LP3100↓700

「私はこれで、ターンエンドよ」

雪乃：LP3600 手札1

モンスター：「デミス」

魔法罫：無し

フィールド魔法：無し

「あうう…ど、ドロー！」

うう…デミスって確かフィールドリセット系……だったはず……
ど……このカードを使えばっ

「私は、魔法カード「並行世界融合」を発動っ！除外されている融合モンスターによって決められている素材をデッキに戻して「E・HERO」と名のついた融合モンスターを特殊召喚します！私は除外されているエアーマンとオーシャンをデッキに戻します！」

「今度は除外されているカードからっ……またあのHEROが来るのね…」

まあ、普通はそう思うよね……だけど、私が出さすのはっ！

「…私が召喚するのは、「E・HERO Great TORNADO>グレート トルネード<」です！」

「な…さつきと違う！？」

暴風と共に、少しボロボロになっているマントを身にまとったHEROが現れましたっ！

「E・HERO Great TORNADO>グレート トルネード<」

ATK 2800 DEF 2200

「このTORNADOもさっきのZeroも、融合となる素材は「E・HERO」と名のついたモンスターとそれぞれに当てはまる「属性」をもったモンスターとなんですっ！だから、一つの組み合わせで違うHEROを召喚できるんですっ！」

「属性……そういうことね」

「はいっ！そして、TORNADOが融合召喚に成功した事により効果発動ですっ！相手フィールド上に存在するモンスターの攻撃力と守備力を半分にします！タウン・バースト！」

「なっ！？」

「終焉の王 デミス」

ATK 2400 ↓ 1200
DEF 2000 ↓ 1000

TORNADOの効果によって、デミスがなんだか弱弱しくなりましたっ。

「そして、私は手札から「E・HERO フォレストマン」を攻撃表示で召喚ですっ！」

更に、体の一部が木になっているようなHEROが現れた。

「E・HERO フォレストマン」
ATK 1000 DEF 2000

「バトルです！TORNADOでデミスを攻撃っ！スーパー・セル

「！」

「あん…っ」

雪乃：LP 3600 ↓ 2000

「そしてフォレストマンでダイレクトアタックです！」

「うん………はあ、なかなかね……」

雪乃：LP 2000 ↓ 1000

「最後に一枚セットしてエンドですっ！」

ゆま：LP 700 手札 0

モンスター：「TORNADO」「フォレストマン」

魔法罫：「セット」

フィールド魔法：無し

「うふふ…ゾクゾクするわね、この感じ………ドロー！………私は、サイクロン」を発動！セットカードを破壊するわ」

「あ！？」

破壊されたカードは…「攻撃の無力化」…

「ふふ…そして、「死者蘇生」を発動よ！蘇らせるのは………「終焉の王 デミス」」

「そんな…ここです！？」

「終焉の王 デミス」

ATK2400 DEF2000

再び、デミスが現れてしまいました…そして私のフィールドにはフォレストマンが……

「少し、勝利を焦ったようね…デミスでフォレストマンを攻撃！」

そして、デミスがフォレストマンを斧で……

「あう…きゃああ！？」

ゆま：LP700↓0

「勝者、藤原 雪乃！この結果は、後日成績に反映しておく。二人とも御苦労だった」

あうう……負けちゃいましたっ…

「ふふ、久しぶりに楽しいデュエルだったわ…ありがとうね」

「はう！？あ、こちらこそですっ」

き、気付いたら目の前に雪乃さんがいましたっ。

「あら、そんなにかしこまらなくてもいいわよ……そうね、今更
だけど私は藤原 雪乃よ、よろしくね」

「えと、宮田 ゆまですっ！よろしくです雪乃さんっ！」

「もう、普通に雪乃って呼んでちょうだい？」

「あ、えと、雪乃……………さん」

無理無理無理っ！明日香さんといい雪乃さんといい同い年に見えな
いよう…

「ふふっ…まあいいわ。それじゃあまたね、ゆま……………あの坊やに
感謝しないとね」

「えっ!？」

何か意味深な笑顔で、雪乃さんは戻っていました……………あれ？も
しかしてばれてる？

と、とりあえず戻ろうかな……………えーと…あ、遊飛君が居た。

「よ、惜しかったなさつきは」

「あっ…見てたの？」

「まあな。気になってたし相手が事故ってたのか思ったより早く終
わったんでな」

うう、恥ずかしい…

「あ…そうだ、遊飛君、デッキありがとうねっ…負けちゃったけど」

「ん？ああ、気にするなって。初めてであれだけ出来れば十分だ」

「…そうかなっ？」

「おう。今回は相手が上手だったってだけさ」

「…うんっ！あ、はいデッキ」

気を使ってくれたんだろうけど、ちょっと気が楽になったや。

そして、忘れない内にデッキを返す。

「ん……………ん……………」

「遊飛君？」

「…うん。そうだな…ゆま、そのデッキやるよ」

……………えええええっ！？

「え、あの、でも遊飛君いきなりなんで！？」

「いや、俺は幾つもデッキ作ってるけどさ、その全てを同じように使っていけるかは自分でも分からんし…：：：：なら、別の誰かに使ってもらうのも良いかなってさ。あとはカードだってたくさん使ってもらえる人の所が良いだろうし」

「でも、やっぱり悪いよう……」

「まあまあ、それにゆまがそのデッキを拾って、今日使ったのも何かの縁だろうしさ……後は、負けっぱ無しってのも嫌だろうし。そいつらだってさ」

「……………本当にいいの？」

「良いんだって、な？…それに、本当はそのデッキ気に入ったんだろ？」

あうっ！？

……………そ、それなら……

「……………うんっ。なら、お言葉に甘えて貰っちゃいますっ！」

「りょーかい。さてと、そろそろ十代が始めるみたいだし見に行くか……相手は万丈目みたいだし」

「えっ！？なんで万丈目君！？」

「さあ？…とりあえず、見に行くか」

とりあえず、二人で様子を見に行きますっ…あ、デッキ、ちゃんとケースに入れておかないと…

「……………縁……ねえ……………そうなんだろうな、どこも壊れたりして無かったし……」

「遊飛君何か言った？」

「ん、ただの独り言」

「……………思っただけど、遊飛君独り言多いよね？」

「う……………自覚はしてる」

続く…

第六話・試験、彼女達の出会い。（後書き）

いや…頑張ったな作者（棒

と言う訳でゆまのデッキが漫画版HERO（TF通り？）になった
のと皆のアイドルゆきのんが登場した回でした。特徴を何とか残し
つつ書こうとしたけど、不安ががが…

さて、それでは今回はこの辺で、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0331ba/>

遊戯王～After of Chronicle～

2012年1月12日18時46分発行